
月華典(げっかてん)外伝 秘する逢瀬は化楽天で叶いしや

柴園寺 椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月華典外伝 げっかてん

秘する逢瀬は化楽天で叶いしや

【Nコード】

N7122D

【作者名】

柴園寺 椿

【あらすじ】

御世の騒乱たる《聖戦》から既に時間は流れ、理想郷は永久の平穏の中に在った。古の生命で楽園都市祈響元帥を務める月読の憂いは、最早小さき事と己の胸に秘め、只管役目を果たすだけの日々となる。しかし、そんな徒然は宮中で流行り出した愉しみに翻弄され、守護神将を束ねる諸天中央・帝釈天に半ば拉致も同然に連れ去られてしまったのだ。《旧神》と《新神》が入り乱れる御世に乗じて謀られた野望は再びの騒乱を招くのか。天輪の正法が織り成す理に果たして生命が採った采配とは――。

壺

月華典外伝 げっかてん

秘する逢瀬は化楽天で叶いしや

壺

永久とこしえに変わりなく、天は偉大なり―

楽園都市祈響元帥・月読の《星読》は、さして何の憂いも無く未来きを示した。

そつと零れる溜息は安堵からか、しかし雪華の如ごとき顔は些かんばせいか憂いを含む。

理想郷を統すべる時の帝に覚え目出度めでたき月天子に与えられた御輿みこしにて、己に課せられた役目を終えたと白亜はくあの聖布を潜くぐり抜け、ひとり静かに其その場を後にした。

「御務おつとめ、御苦勞様で御座います」

麗あまじしき主を待つていた従者が恭つやうやしく出迎えると、月読は優しく目を細めて頷いた。其その微笑から何事も大事無いと推測し、従者の心は晴れ渡る。

水の様に流れる素直な髪を二つに結ゆい、正装で身を包んだ祈響元帥すいの忠実な従者はそう、未だ少女という年頃で在った。しかしながら秀ひいでた才を見込まれこうして仕えて早幾年か、今では確たる存在に成りつつある。それは腕に抱える無数の文ふみからも知れる様に、主が務めの間には是非ぜいにと渡されたのだらう。

このところの流行はやりりか己おのが目に留とどまった者に文を送り、誘いざないに乗じて何かしらを目論もくろむ輩やからが増ふえていた。大抵は権力抗争の一環いつかんとして強力な立場を擁立ようりつする為に近付き、あわよくば取り込むといった形勢で在ったが、中には色欲しきよくの為の手段という、大凡宮仕えにあるまじき行為たのを愉たのしむ者も居たのだ。

「多くの御方おかたから御誘いを受けておりますが、如何致いかがしましょう

…
故に、その御誘いの内容など聞かずとも知れたことと、月読はあからさまに二度目の溜息を吐く。

「丁重に、お断りを」

其れでも一つとして破り捨てることをせず、必ず断りの挨拶をさせるこの礼儀正しさが少女の誉れでも在った。如何に馬鹿げた事でも相手の立場を尊重し、節度を以って対処する主は正に、数多の願いを叶える生命だと崇拜していたのだ。

だが、送り主はこうして毎度同じ手口で己が望みを叶え様と文を渡し、その都度断られては未だ誰とて叶わぬ願いに嫌気も差さず、繰り返し誘うのだ。

「ですが、此度は帝釈天様からも御誘いの文が…」

そんな主の応えは分かっていたが、無数の文に紛れる唯一通だけが気掛かりと、少女は如何したものかと尋ねた様だった。

只管に拒んで来た月読が、ほんの僅かに躊躇する。

帝釈天と云えば、共に楽園都市に於いて玉座に仕え、守護神将を束ねる生命だ。理想郷の幻界の一つで在る仏界にも通じ、今や時の帝に次いで神々の頂点に君臨する存在と成って居た。誘いを無碍にするは、如何かと案じられる。

「…御伺いに、なられますか？」

流石の月天子も帝釈天には逆らえぬと覚悟したのか、振り返り少女を見詰めた。

「瑠璃、丁重に、お断りを」

しかし、告げられた言葉はやはり、同じだった。瑠璃と呼ばれた少女は不安気に視線を向けたが、澄んだ藍色の小宇宙は何処までも毅然と讃えられ、揺ぎ無い天の二柱の生命の存在を象徴しているかの様だ。

「畏まりました」

美しく、清らかな祈響元帥。

少女は可憐な華を想わせる笑みとはつきりとした口調で用件を賜

ると、深く一礼して直様傍を辞した。その軽やかに宮中に消えて行く姿に月読はいたたまれなくも後を任せ、己の居城・月宮天へと先を急いだのだった。

独り渡る回廊には他の神の気配は無く、只の静寂が横たわる。玉座の膝元では如何なる悪鬼も手出し出来ぬと踏んでか此処に至るまで、終ぞ警備に当たる神將の姿を見ることはなかった。それは、己が示す《星読》の所為でもあったのだが――。

しかし、其の役目上、常に多くの命の願いを聴く月読は、ほんの僅かな間でも解き放たれる、独りになる機会を心なしか待ち侘びていた。

稀なる《旧神》で在り時の帝の御世を導く要は、一握りの生命しか識ることのない、強大な時で縛られて在ったのだ。

決して諍うことの赦されない、天の鎖に繋がれて。

月宮天までの歩み慣れた途を辿りながら又と無い好機に些か気が緩んだか、ふと視線を外に向けて見れば、素晴らしい程に青い空とそして、全てを照らす御光に心を奪われる。偉大なる光の神の無量寿光は、先の《星読》同様に、永久に変わらない。

御世に安寧の采配を下す己と同じ時間を渡る存在は、他の神とは比べものにならぬ程の影響を与えていると果たして気付いているのかと、月読は呟く。

其れは偏にこの最近、黄金の輝きの主に合間見えていない事も起因していた。

「待ち望む神からの文だけは、頂けないものなのでしょうか…」

「其の御相手とは、誰かと問うは愚問かな？」

誰も居ないと思い込んでいた故にか、無防備にも顕にした其の言葉を聞き咎められ、大いに狼狽する様子に気配無く現れた無法者は、乾いた笑いを放った。

「何も、其の様に驚かれなくとも。別に貴殿に仇名す者では在りませんが？」

「…何用で御座いましょう。諸天中王（帝釈天）殿」

何とか平常心を装いながら、月読は無法者の名をそう呼んだ。

「畏れ多くも月天子に於かれましては御機嫌麗しくー。我が誘いをお受け頂きたく直々（じきじき）に、お迎えに罷り来しましたまでのこと」

必要以上に遜った物言いはともすれば、皮肉とさえ感じられる。

我が身と同じ《旧神》を差し置いて、頂点へと登りつめる《新神》には些かの遠慮も無いのかと半ば呆れつつ、辞令と取られた手に伝わる情に嫌悪感を隠せなかった。

理想郷と平ばれる時の帝の永き御世で、紡がれる神話の担い手として幾つかの種族が挙げられるが、簡略に述べれば神族、獣族、人族だろうか。

だが月読の様に、創世の頃からの所謂《旧神》と、帝釈天の様に《新神》と分かれることを踏まえると、神族と云えど複雑に存在の違いがある様だ。御世の安寧を揺さ振る悪鬼でさえ、神の眷属とされている。

神の世と聞けばそれは如何にも神聖、且つ平穩で在ろうと想うが、情というものが神にも有る以上、穏やかには済まされない事も間々起こり得るのだろう。小競り合い等は広い幻界に数えることは不可能な程、そして此处、樂園都市でさえも、水面下では既に幾つも起き、鎮静されているのだ。

それが最も長けていた神がこの帝釈天であり、事有る度に功績を上げて今では御世の守護神を総括する諸天中央という任に就いている。

己の力で伸し上がった訳なのだから、始めから存在そのものに意味のある月読等、《旧神》とはなかなか折り合いが付かないことも云ってみれば小競り合いの一つなのかも知れないが、専ら噛み付くのは血の気の多い《新神》の方であった。

「務めを終えられたばかりで御座いましょう。ゆるりと御寛ぎ頂ける様、楽師も呼んでおりますれば、是非にも我が善見城へお越し

下され」

言葉では下手にもそう云いながら、帝釈天は掴んだ月読の細い手首を引いて、己の懷へと寄せる。そうでなくとも武神で在る者に力では敵う筈もないのに、些か乱暴な扱いに眉を顰めれば、月読の表情を見て更に愉しむかの様にこう付け足した。

「これは失礼。尊き御方に無体な真似を致した。ほんに月天子殿は、か弱き姫君の様で在られますな。御手もこの様に細く……」

他の誰の目も無いのを良いことに、立場的にも上位の月読に対し無礼千万なる振る舞いに物言いと、畏れを知らぬ帝釈天には抗うだけ無駄であった。

掴まれた手首は熱を持ち、痛みを通り越して痺れ始めている。このまま連れ去られるは拉致も同然と思いながら、其れでも氣丈に訴える。

「そう……云われるのならば、お放下さい。無礼です」

僅かに震える唇と、潤んだ藍色の小宇宙。雪華の如き顔を不安と怖れで曇らせ、鎧に身を包んだ帝釈天に抱かれれば其れだけで、武神に手折られた華そのものと見える。両者共が引き立てる天上の美が、奇しくも其処には在ったのだ。

「お顔の色が優れませぬな。抱き参らせようか？」

月読の訴えをしかし無視したまま、云うが早いか強靱な腕で軽々抱き上げられ、足元の覺束なさに思わずしがみ付けば上々とばかりに身を翻す帝釈天は、何事も無かったかの様に回廊から空へと踊り出た。その余りの唐突さに更に驚き、声無く従うしか術を持たない月読は、しかし直接風を受けることはなかったのだ。

気が付けば、身を包む外套で冷たい風を遮られている。それは紛れもなく、帝釈天の鎧を覆う聖布だった。

言葉とは裏腹に、何処にも己を氣遣う素振りなど見せなかった者のさり気無い所業に戸惑い顔を窺えば、当然と威厳に満ちた表情に出会う。

御世の悪鬼を狩る守護神將の頂点に起つ者らしい、揺るぎ無い自

負と氣高さが表れる容姿は美丈夫と謳われる、比類なき様子だった。
本は一介の武神に過ぎなかった帝釈天の所謂出世話は、樂園都市のみ為らず広く幻界に及び、あわや謀反の騒ぎに迄発展しかねない事まで起こった。月読等《旧神》だけが存在の重きを於き、《新神》が軽んじられる中での出来事は一大事と成ったがそれを諫め、導いたのは他ならぬ月読の《星読》だったのだ。

―彼の者は大いなる星を抱きし生命。御世を護り、安寧を保つ者―
天の二柱と称される祈響元帥の言葉で事無きを得たが、これを切っ掛けに《新神》が勢いを増し、今となつては宮中に於いて政に携わる者の殆どが帝釈天等、自らの力で存在を知らしめた、《新しき（新）神（神）》であつた。

そして、玉座（帝）はそれを認めたのだ。

天に唯一の生命は御世に君臨する際、自らを《天無帝》と称し、強大なる時を以て理想に永遠を齎した。如何なる命も是に遵う為れば、終ぞ終焉無き至福と繁栄を約束すると、大凡すべての命を見定める万華鏡の眸を輝かせた。

抗う命なぞ、在りはしない。

月読は何故にか帝釈天の腕の中で、哀しき起源を思い起こしていた。そして自らが真に望むは何であつたかと、薄れゆく記憶を辿り始めていた。

が、まるで其れを咎めるかの様に、強い風が月読を襲う。

夢から無理矢理に呼び覚まされたは帝釈天も同じで在ったと我に返った刹那、聖布で創られた結界が何者かにより解かれたのだと氣付いた。

前方に漂う気配が尋常でないことを、月読も知る。

「何処の遣い魔か、我を諸天中王（帝釈天）と知つての事為らば、愚かにも程がある」

呆れる様に呟く傍から漲る鬨気はそれだけで、威圧感を見せ付ける。

月読を抱きながらも一步も怯まぬは、現在の諸天中央という立場

からの慢心ではなく、全ては自らで培われた経験と己の力を信ずる者の、確固たる事実に基づく余裕から、そして、何より帝釈天の持ち得る力が最強と云っても過言でないことを、己が自覚しているからなのだろう。

「月天子殿、ご案じ召さるな。直に片は付く」

「し…諸天中王（帝釈天）殿、何を―」

よもや目の前で斬り合いになるなどと夢にも思わなかった月読の懸念は的中し、帝釈天は片腕で月読を抱き直すと躊躇いもなく剣を抜き放った。

「そんな…。お待ち下さい、諸天中王（帝釈天）殿！」

「しっかりと掴まっておいでなさい」

何とも愉しむかの様に笑みを見せ、行く手を阻む影に身を躍らせた帝釈天は月読の制止も聞かずに先ずは一つと斬り伏せた。

そして、影は影に非ずと鮮血を散らし、顔を背ける月読に独特の臭いを沁み込ませる。必死に目を閉じて耳を塞いでも、如何しようもなく届く断末魔は一種の《祈り》と成り、その祈りを聴き入れる祈響元帥を苦しめるは当たり前だった。

たった一つの命を滅するだけで深く傷付く月読に苦笑しつつ、それでも襲い来る魔物に屈する訳にもいかぬ帝釈天の心情を察するが、流石に僅かばかり強行策だった。

まるで待ち受けていたかとも採れる襲撃は、確かに何者かが仕組んだ事であり、そしてそれを承知の上でか月読諸共に渦中に飛び込んだ帝釈天は、高が遣い魔で在っても斬り伏せることで挑戦を受けて立つ意志を見せたのだ。

「御辛抱為されよ、是も務め故」

そう耳元で囁かれても、既に意識も朦朧な月読には応えることが出来なかった。

これでは更に警戒され、今よりも嫌われるであろうと自嘲しながらも切先は、逸れることなく遣い魔に向けられる。今出来ることは、先に告げた様に直に片を付けることだけだと同時に左右から回り込

んだ影を見事にかわし、後ろに歪んだ気配を捉えて一刀両断した。

「嗚呼——」

両手で顔を覆い、二つ目の命が潰えるを耐えた月読だったが、これ以上は無理だと弱々しくも、震えるままに言霊を紡いだ。

『願わくば——』其れは、若しや遣い魔とされた命の《祈り》で在ったのか。

——願わくば、潰える命が輪に触れんことを——

俄かに目を見張ったのは、蠢く黒い霧が一瞬で淡い光に包まれたからだだった。

至高の輝きは徐々に色を取り戻し、やがて藍色に染まってゆく。其処に現れた空間はまるで小宇宙の様に漂い、理想郷全土を覆うとされる大宇宙の幻想を魅せたのだ。

流石に闘気を削がれた帝釈天は一つ溜息を吐くと、月読が描き出した恐らくは仲間の《祈り》に動揺する遣い魔に向って剣を翳し、一言呟いた。

「月天子殿の慈悲だ。——去れ」

その眼光にたじろぎながらも辛うじて分を弁えたか、影はやがて跡形もなく消滅していった。そして《祈り》は同じ様に、澄み切った大気に同化したのだ。

「……全く、貴殿という御方は……。月読殿？」

偉大なる時のほんの僅かなのだろうが、其れでも十分に畏れる存在なのだと思せ付けた月読は、儚くも帝釈天の腕に身を預けて意識を手放していた。

楽園都市の天空にも浮かぶ月輪を神格化した生命は、純白の滑らかな肌に深い藍色の小宇宙を讃えた美しき顔で在った。

今は色を失くした唇も、《星読》を伝える際には華の様に色付き艶めくのだ。

善見城に住まう数多の姫君に、いや、楽園都市の何処を探しても

之程の清らかさを併せ持つ美しさは無いだろうと、暫し見惚れて立ち尽くす帝釈天だったが、密かに交わした約定を破つてでも手に入れたいと思い出している己に些か躊躇いを覚える。

そつと頬に触れれば指に吸い付く肌と、薄く開かれた唇に我を忘れて己が唇を合わせれば、何とも甘くしなやかな情が全身を駆け巡る。触れ合つた先から温かな命を吹き込まれる其れが、月読の真の時である《蘇摩》だったのだ。

「なるほど。彼の御方が情を掛けられるのも道理。仮令一戦交えてでも、と思うは愚かであろうか？多聞天」

「さて。如何でしょうか？」

何時の間に現れたのか、帝釈天と同じく鎧に身を包んだ武神が一人、傍らに在った。さして案じていた風でもなかったが、

「月天子のお迎えが余りに遅いので来てみましたが、お邪魔でしたか？」
と云う。

「白々（しらじら）しい奴だな」

氣心の知れた仲でもやはり特別か、帝釈天は他の誰にも見せない表情で答えた。

「如何されるもよろしいが、一先ず城へお戻りを。往来で肌を合わせるには相手が悪過ぎますよ。恐らくは、彼の御方も御覧になつておられることでしょうし？」

そう云い四方に視線を飛ばしながら、氣配を探る多聞天はこの会話ですら耳に届いているのだらうと呟く。約定を交わした相手が相手だけに、些か氣になる様だ。

「珍しく、氣に病むか？だが必要ないだろう。この諸天中王（帝釈天）に依頼を遣したのだ。それが如何いう事か、解らぬ程愚かではあるまい」

欲しいものは、必ず手中にする―それが諸天中央・帝釈天の怖れられる理由でもあると、自らが云う。

「はいはい。仰る通りで」

呆れて物も云えないとばかりの素振りです。踵を返すと、さつさと空を翔け出してしまう多聞天を呼び止めるが、全く聞く気もないのか振り向きもしない背に罵倒を浴びせ、漸く後に続いて己の居城・善見城へと再び向った。

その姿を物陰から窺う者に果たして気付いているのか、未だ事的首謀者は鳴りを潜め、故にお互いに出方を待っているとも云える。

先手を打ったのは帝釈天だったが、しかし事を諫める糸口は無いに等しい状況で、樂觀視は出来ない。まさか己が標的となっていると露知らぬ月読が、半ば無理矢理に善見城へ連れて行かれた事に対し如何思つかは、この際氣にせずにおこうと肩を竦める帝釈天に、「貧乏くじを引かれましたな」と苦笑したのは多聞天だった。

「それにしても、祈響元帥殿は本当にお気付きでないのです？」

「畏れ多くも月天子殿を狙う輩が存在するなどというお考えは、この貴神には浮かばないのだろうよ。余りに清らか過ぎるのも、如何かというところだな」

「…お目出度いことですな」

そう綴る多聞天も、帝釈天と同じ《新神》で在った。

共に先の聖戦に於いて、偉大なる功績を遺した武神として今は守護神将の要となり、玉座直々の配下・天軍四天王に席を置く。

独り北方を護る際にはその名を毘沙門天と名乗ることもあったが、聖戦後は専ら宮中に仕えることの方が多く、他の四天王と同じ様に自らの守護方位は選任の神将に任せ、委ねていた。

諸天中央となった帝釈天の、謂わば右腕的存在がこの多聞天だった。

玉座が御世を平定したと云っても何処かでは反旗が翻り、愚かにも理想郷を我が物としようと企む生命もなかなか後を絶たない。しかしながらそのお陰で帝釈天等《新神》が活躍出来る戦(場)が在る訳だが、今回は些か深刻なのは確かだ。

「とにかく、御世には未だ、祈響元帥殿が必要だ」

己が腕に抱く星の導き手、偉大なる《旧神》月読の存在価値を如何

何思っているのか帝釈天は只、今はそうとだけ云うに留まったのだ。
った。

時の帝の御世・理想郷は、其の名の如くありとあらゆる理想で創られて在る。

大凡無いものは無く、又、要らぬものも、無いという。

是の何処に不自然さが在ると、其処に息衝く命は疑い懸念することすら無い。

では何故、玉座に仇名す者が現れるのか―だ。

楽園都市は御世の中心、政が行われる宮中の奥深くに静かに座す一つの姿が在った。広い室内に灯りは只、その手元だけを照らしている。

見れば何やら書状を認めている様だったが、内容は確認出来なかった。

如何見ても、高官の様子だ。

髪は整い頭上に冠を置き、口元には見事に誂えられた髭がある。身形も相当なもので、絹の羽織物は金糸の刺繍で彩られている。

文字に手馴れたところからも容易に武神でないと知れるが、傍らにはこれまた相当な太刀が置かれていた。

その主が、徐に筆を止めた。

しかし振り向くことなくそのままゆつくりと、是非を問うたのだ。

「首尾は、如何に？」

常に控える筈の者も下がらせ待っていた気配に、まさかの事態も考慮していたのだろうか直に返らぬ応えにそれだけで、事が失敗に終わったと計る。

「…まあ、よい。此度は最初から、多くを望まぬ故な」

「―諸天中央が直々（じきじき）に―」

闇の中からそう告げる者は、何処かほっとした様子だった。若い、女の声だった。

「ほう―」蓄えた髭に指を這わせ、これは一つの朗報とばかりに

短く答える。そしてその先を促す様に、僅かに顔を覗かせた。

灯りに照らし出されたその顔は、信じられないことに高官どころか正に、御世を担う者のひとり、無能勝明王・阿氏多であった。

口元の笑みは何を告げるか強かに、手始めの首尾など最早気に留めずに先を読んだか。事を謀る者は、全てにおいて秀でているのだろつ。

「これより善見城へ入り、仔細お伝え致します」

「無用だ。あの者に計略なぞ有りはすまい。一切が太刀において諸天中央という位に就いたのだ。――問題は、陰だ」

そう云う阿氏多の顔に、挑戦者たる表情が浮かぶ。自らと同じ、陰に潜む者が帝釈天を動かしたのだと確信した様だった。しかし、守護神将を束ねる者に些事を出すとなれば、並大抵の位に居る神ではない。

「…事は、更に慎重に進めねばならん…か」

低く唸る様に呟かれた言葉に女は聴き取れず、落ち着かない様子で黙り込んでいたが、主がそのまま再び書を認め始めると、次なる役目は恐らくその書を預かり直に手渡すのだろうと決め込んでいた。そして、僅かな間も無くそれは現実となる。

阿氏多は自ら灯りの届かない女の跪く場まで歩を進めると、音も無く傍らに腰を下ろした。驚くには値しないのか、足音も、気配すらも感じられなかったのだ。

闇の中突然耳元に囁かれた言葉と、己が懷に忍び込んで来た掌に驚愕し、身動き出来ない女の様子に目を細める阿氏多は、ゆるりと味わう様に豊かな胸の感触を確かめ始める。合わされた襟元は、徐々に乱れていった。

「褒美を遣わす。ひと時快樂に酔い痴れるがよい」

「あつ…」俄かに甘い吐息が零れたは、着物の上を弄っていた掌がするりと肌に這わされたからだだった。直接伝わる温もりは、下位の身に余る光栄とばかりに畏れながらも委ねる身体を阿氏多は丹念に愛撫する。

露になつた女の胸は艶やかに色付き、微かに震えて吸われるを待っているかの様に張り出していく。乱れる息は指先で弾くと更に増し、堪えきれずに己が手を当てて何とか欲望を抑えようと試みるが、それは主によつて許されなかった。

「ああ……。明王様……。もう……。お許しを……。如何か……」

目を閉じ顔を背ける女に主の冷やかな笑みは分かる筈もなく、さすがに乱されて腕にしがみ付けば、そのまま床に投げ出された身体を上から覗く視線は容赦なく、全てを暴いていった。

力で押さえ込む必要などない以上、阿氏多は両手で女を弄ぶことが出来る。

忍び装束は通常の女の装いと違い、裾から肌が見え隠れない分そそられる情はなかったが、布を裂き、内腿が現れると其処から匂い立つ色香に唇を当てる。

片足を大きく抱え上げられ両の乳房を揺らす格好に女は戸惑うことなど最早なく、与えられる快感に既に半ば朦朧とし、只従うだけの下女で在った。

響き渡る声は女のものだけで、その悦びも、女だけだったのだ。

阿氏多の指は一度、開いた身体に埋め込まれたが直に引き抜かれる。代わりに宛がう猛りは甘い叫びと共に、女の身に深く沈められていった。

「ああ、無能勝……。明王……。様……」

零れ落ちる涙は主に抱かれる喜びからだろうが、欲望を遂げるだけに腰を進める者は無言のまま、己の装いを乱すことなく身体を繋げる。

「はっ……。あ、あ……。あう」やがて、女は阿氏多の進りを受け止めると、同時に果てるこの上ない至福を味わいながら余韻に浸り、銜え込んだ男が身を引くとその寂しさに浅ましくも強請り始めたのだ。

「明王様、如何か……。もう一度……」

しかし、伸びてきた腕に阿氏多は鋭い眼差しを返し、女は酷く狼狽した。

己が何を口走ったかを思い知ると、途端に乱された忍び装束を合
わせてその場に平伏した女の胸は卑猥にも布の端から覗き、男の欲
情を煽ったのか。

だが、只管に跪く者に主は強いらずとも、自ら足を開き、再び受
け入れるを望むだろうと思えば何やら興も削がれると内心冷めたま
まに、それでもこれを択んだは阿氏多自身だったのだ。そう、意味
も無く女と肌を合わせるなど皆無なのだ。

「我が、欲しいか？」と敢えて尋ねれば、素直に頷く様子に口の
端が歪む。

阿氏多は認めた書状を懷から取り出すと、女の目にそれを確認さ
せた。

「よかるう。汝には特別、最も重要な任を与える。是をその身深
くに刻み、我の言葉を伝えるのだ。——今、我の力を注いでやろう」
その言葉の意図を計りかね、女は身を竦めた。言い知れぬ恐怖を
感じ取ったは本能の成せる技なのだろう。下位の者で在っても命は
等しく存在すると、しかし高位の主にその見解は、哀れにも在りは
しないのだった。

手荒に両肩を抑え付けられいきなり唇を宛がわれた胸から焼かれ
る感覚に、震える身体は身動き一つ出来ないで、僅かな愛撫を強請
つても叶わぬ行為に身は硬くなる。しかし一方では既に潤み始める
己を何故にか呪いながら、何一つ知らされぬままに女は最後の悦び
を味わうこととなった。

「何処で知れるか判らぬ事は、最善の対処を以って謀る。よもや
女の体内に計画が記されているとは思わぬであろう。仮令捕らえら
れたとしても、然るべき者にしか伝わらぬ様、力を駆使しようでは
ないか。——如何だ？心地好いか？」

「んく…ふ…。あ、ああ——」奥深くで蠢く感触に苛まれ、動かず
にじつとしていれば余計に苦しいとばかりに女の腰は踊る様に振り
回されていた。

十分に慣らされる間もなく打ち込まれたが、一瞬の痛みは今とな

つては只、甘い疼きで満たされている。この後は絶頂を迎えるを待つだけと、含まされたものを締め付け包み込む女に阿氏多の思惑は聞こえなかったのだ。

「だ…め。もう…。は―あ…。あ、無能勝明王様―あ」

ひとり身悶え果てる様子を、阿氏多は目を細めて見詰めていた。それは深き情を掛けるでは決して無い、無慈悲なる表情であった。満足気に見えたはやはり、己が計略の一片として書状を遣わす女に与えた自らの力に納得してか、これで完成と体内に注ぎ込んだを好しとして引き抜いた。

そして、それでさえ感じたのか溜息を漏らす女に短く命を下す。

「次は、抜かるでない。―行け」

「承知…致しました。必ずや、御期待に副えてみせます」

男を受け入れたばかりの気だるい身体を引き摺りながらも女は主の命に従いそう言つと、覚束ない足取りでその場を辞した。

女は立ち上がった際に、生暖かいものが内股に伝う感触に震えたが、拭うこともなく歩いたのだ。是が、主と繋がり我が身に情を注ぎ込まれた確たる証と両腕で掻き抱き、阿氏多に謀られた事を正に夢の様なひと時であったと頬を染める。

再び宮中の奥、自らに与えられた自室で独り、不敵な笑みを讃える御世の担い手、無能勝明王・阿氏多は、これから起こり得る事に逸る心情を抑えるに必死であった。

今迄に誰とて想い付くことも無く、そして叶いはしなかった企てに、如何しても未来を読み、望みを聴き入れる祈響元帥の存在が必须要と自らに念を押す。

「邪魔立ては赦さん。誰で在ろうともな」

そう呟く阿氏多の目には、御世を我が物とした暁の己が処遇が煌いて視えた。

時の帝をも凌ぐ存在、この世界其のものを創造した神に成る。

創造神・天輪王と成ることこそが、阿氏多の真の目的であったのだ。

その願いが如何なるものかなど、無能勝明王などには解り様も無い故に。

式

式

何処^{どこ}からか聞こえてくる楽^ねの音に、月読^{つきよみ}はそつと耳を傾けていた。柔らかに包み込む様に爪弾^{つまひ}かれる弦の音色は正しく結ばれ、傷付いた心を癒してくれる。その心地好さに目覚めたものの、もう少し浸^{ひた}つていようと瞼^{まぶた}を閉じたまま僅^{わず}かに身じろげば、目敏^{めざし}くも見逃さなかつた弾^ひき手によって遮^{おさえ}られてしまった。

「お氣付きになられました？ 月読様^{つきよみ}」

透き通る様な声の主は残念にも手を止めて、そう語り掛けてきた。しかし、月読^{つきよみ}が何時^{いつ}も傍に置く少女の声でないと密かに驚き瞼^{まぶた}を開ければ、見知らぬ一室に更に驚愕^{きょうがく}したのだ。

夢見心地に居た場所は、己の居城・月宮天の自室だとばかり思っていた。だが微^{かす}かに残る香は記憶の片隅に、何やら不快さを否^{いな}めない。

未だぼんやりと、焦点の定まらない月読^{つきよみ}の様子に再び声を掛ける者は、具合を氣遣^{きづか}い優しく微笑^{しほ}みでは今暫^{しば}く其^そのままにと云^いった。そして、告げられた御名^{みな}に冷や水を浴びせられた月読^{つきよみ}は、藍色の小宇宙^{とみ}を見開いて思わず身体を起こしていた。

当然、視界が大きく回る。意識が戻^{もど}ったばかりの状態^{じょうたい}で急に身を起こすは流石^{さすが}に無理があつたのだ。が、諫^{いさ}める白い手を払い除け、何とか立ち上がるうとした。

「ご無理をなさつてはいけませぬ。月読様^{つきよみ}、如何^{どう}か、落ち着かれ
て……」

「此処^{ここ}は？ 何故^{なぜ}……我^{わたし}は――」

そう云^いいながら辿^{たど}る記憶と残り香と、先の不快さを漸^やく繋^つぎ告げられた御名^{みな}に結び付けられ、自ずと知れる問いの答えに月読^{つきよみ}は深い溜息を吐いた。

「此処は善見城の一室、月輪の間ですわ。…落ち着かれまして？」
唄う様に、目の前に居合わせる弾き手は云う。華やかに装い大切に弦を抱く者は、月読の為に諸天中央・帝釈天が招いていた楽師・乾闥婆の歌姫だった。

そして月読とはいえば、帝釈天の招きに応じた心算などなかった。如何に今は諸天中央という高位に在ったとしても、《旧神》で在る己に対し傍若無人な振る舞いが許される筈もない。

況して我が身をあの様な斬り合いの最中に置くなどと、守護神将の頂点に起つ者のすることではないと、珍しく気を昂らせていた。それを見た歌姫は、不可解だとばかりに頸を傾げて尋ねる。

「何か、お気に召さぬ事がありますの？聞けば諸天中央様直々にお迎えに上がったとか…。それも、彼のお方の腕に抱かれて…」
美しい声に隠された毒気に月読は視線を向けた。歌姫は、藍色に煌く小宇宙にあられもなく映し出された己の姿を視る事となり、僅かに躊躇いふわりと席を立った。

「美しい月読様、さぞや其のお心も、一片の曇りもないことでしょう。ですが如何か、お気を付けになられませ。邪なる者が狙うは正に、其の清浄さですから」

帝釈天の居城・善見城に設えられた、恐らくは月読の為の一室月輪の間を退室する間際、挑む様な口振りで歌姫はそう云った。そして、月読の返答を聞く前に扉を抜け、足早に去って行ったのだ。

独り残された祈響元帥が小宇宙を翳らせたのは、云うまでもないだろう。

「那羅姫…。貴女の声は、我には《祈り》と届くことをご存知か？」

無論、全ての願い―祈りが月読に叶えられる訳ではないのだが、時として女性神の情は強く表れることがある。そして其処に心が宿れば手に負えない事も、間々起こり得るのだ。純粹で在ろうと無かるうと、云ってしまえば厄介なのだ。

月読は今の言葉で歌姫が帝釈天に向ける情が恋、或いは愛で在る

と覺つた様だ。

確かに《新神》の中でも崇拜者は多いと聞き及んでいた。強い力だけでなく、見目麗しい存在は数多の心を捕らえるは容易なのだろう。人目を憚らぬ真つ直ぐな情と確かな剣技は見えるもので在り、信仰の対象として映り易い。同じ神族でそうなのだから、力無き人族には打って付けとなった様だった。それに懸念を抱くは、己が《旧神》故かと徐に小宇宙は宙を漂う。

遙か意識を飛ばせば仮令何処に居ようと、感じることの出来る相手はしかし、己とは比べものにならぬ程の尊き生命で在った。

御世が未だ、幻想郷と平ばれし時間――。

ふと、頬を伝う雫に月読は我に返る。昂つた情がそのまま鎮まらぬ所為かと困惑し、帝釈天の無礼に影の襲撃と立て続けに我が身に起こった出来事を想った。

若しや、事が起きようとしているのか、容易為らざる事が。そう思うだけで震え出す月読は、直にも宮中に戻り、《星読》をもう一度試みようかと考えた。

それには先ず善見城から出なければと意を決し、扉に向って歩き始めた時だった。

何の先触れもなく開け放たれた月輪の間は、其処に現れた武神によつて静寂と神聖さを跡形もなく吹き飛ばされてしまった。そして代わりに華やぎと、揺ぎ無い強き力が齎されたのだ。

まるで月読が待ち望む、彼の生命と等しく大いなる光に包まれた武神はそう、この善見城の主、諸天中央・帝釈天だった。

「御気分は如何か月天子殿」

突然の来訪に声無く立ち尽くす月読を余所に、連れていた警護の神将を扉の外に配置させると、室内には己ともうひとりの存在だけを許して後ろ手に閉ざされた扉を確認し、目だけで相槌を交わして月読を見た。

その視線を逸らすことも出来ず、只管に身を硬くする月読の様子に大胆にも笑みを浮かべた帝釈天は、踏み出した数歩で近付き震え

る頤を掴むと藍色の小宇宙を覗き込む様に上向かせた。

「歌姫が何やら御機嫌を損ねたか？だとすれば、罰せねばならぬが――」

思いも寄らぬ発言に、己を見据える無頼者の咎はでは、如何にと問う月読だった。

「これは――。流石に月天子殿。然しながら上気した御顔も麗しい……」

そして、抗う間も無く合わされた唇に驚き両腕で押し退け様としたが、逆に細い手首は帝釈天に易とも容易く捕らわれてしまった。成す術も無く、執拗に貪られるだけの接吻に息も出来ず、月読は必死で唇を引き結ぶが思いきり手首を掴まれた痛みに漏れる悲鳴ごと、再び深く接吻られる。

そうして帝釈天が堪能した頃には既に意識は朦朧とし、心ならずも力強い腕に崩れる儚い身体は大切に運ばれ気が付けば、寝台に横たえられていたのだ。

「如何やら月天子殿は大層御疲れの御様子。暫しこの諸天中央が善見城にて御静養される旨、宮中に遣いを出そう。――多聞天……」

「承知致しました。どうぞごゆるりと、御寛ぎ下さい」

その会話を意識の片隅で聞いていたが、知ってか知らずか帝釈天の接吻は月読の真の時とされる《蘇摩》を求め、奪い尽くす勢いであった為に声も出せないで居た。

しかしそれ以上に月読を苛んだのは、帝釈天との接吻そのものだったのだ。

俄かに優しく長い髪を首筋から梳き上げられる掌の感触に、怖れと怯えて冷え切った身体は意を反して解き解されてゆく。

温かく包まれる慈悲を、何故にこの者から感じるのかを月読は又もや判じることが出来ないまま、溢れ出す情は美しき顔を濡らす雫となつて後から後から頬を伝う。

其れを拭う指が己の対と称される、理想郷東光殿・天照で在ればどれほどに心休まり癒されるであろうかと嘆く月読を、帝釈天は深

い慈しみを以つて見詰めていた。が、多聞天に向き合つた時にはその眼差しは、闇に潜む謀を見定め打ち砕く為の鋭利で残虐な趣に豹変していたのだ。

「まず是一手。次はどのような策に出るか、楽しみだな」

「悠長なことを…。祈響元帥殿が宮中に戻られぬでは、些か事は大事になりますよ？恐らく首謀者は諸天中央の謀反と逆手を採るでしょうし…」

「…なるほど。我が身を犠牲に敵の正体を暴く―か」

「あのですねー」と自らが云わんとしたことをもう一度云い聞かせようと、多聞天は顔を顰めてやや上から帝釈天を見た。

「いいですか？これは単なる権力抗争ではないのですよ。一つ間違えば御世は騒乱の世に逆戻りです。只でさえ我々《新神》の風当たりは強いというのに、謀反の濡れ衣を着せられたんじゃあ話にもなりません。それくらい貴方だつてお分かりで…」

と息巻くところを随分適当に「よいではないか」と遮る帝釈天は、事的首謀者を上回る策士なのかも知れなかった。

「この際、玉座を狙つてみようではないか。上手い具合に御世の二柱は我が手中も同然。案外事は有利なまま、容易に進むかも知れん」

これには流石にお手上げと、多聞天は天を仰いでいた。

一介の武神で在つた頃よりの付き合いで、帝釈天の気丈さは熟知している心算だった。見てくれの激しさとは裏腹の、緻密な計略によつて事を運ぶ繊細さも併せ持ち、剣技だとして闘神を凌ぐ程の腕を見せる。

しかし、己に敵対する者には容赦の無い所業に眉を顰め、古から御世を担ってきた《旧神》や一部の神からは、怖れと不安で事在らば失脚させる隙を窺う節も見られたのだ。多聞天が案じるは、他でも無い其処であつた。

「まあ、どちらにせよ、此度の謀を暴けば我が存在に否を唱える者はいなくなる訳だし、一石二鳥だとは思わんか？…ふつ、我等《

新神》が御世を牛耳るは、詰まるところ是偏に輪の宿命ということだ」

「大層な、大義名分ですね。呆れましたよ」

全く以つて器の違いに感服させられたことを多聞天は敢えてそう云いながら、それでも己がこの帝釈天の右腕だとの自負もあり、こうなれば共に起つより他はない。

「いいでしょう。貴方がそのお心算なら、付き合いますよ」

終に腹を括つた四天王最強の力添えは、帝釈天にとってこの上ない上策だった。

「それで？如何します？」

「―そうだな―」と徐に投げられた視線の先を見れば、閉じられた扉の向こうに己も気配を察したか、音も無く歩み寄り多聞天が勢いよく扉を開いた。

僅かに悲鳴を上げた者は、室内の様子を窺っていた歌姫だった。

「…何用ですか？乾闥婆の歌姫・緊那羅殿」

確か、扉には警護の神将を着かせた筈だった。しかしその姿は何処にもなく、些か顔を青ざめさせた歌姫のみが其処に立ち尽くしている。

如何したものと帝釈天を振り返れば、寝台に横たわる月読を隠す様に立ち、何が可笑しいのか笑みを浮かべてじつと歌姫を見据えていた。

その表情は敵の頸を落とす際にも変わらない、残忍さを漂わせたものだど気付き、蒼白になる者の様子さえ愉しむかの様に見えた。

「如何された那羅姫。天界一の美声を失くされたか？」

徐々に詰め寄る帝釈天に恐れ戦き、哀れにも涙を浮かべるか弱き姫君には余りに無体な仕打ちか、それでも一向に表情を緩めない者は一切の慈悲を与えない、正に敵に対する趣でこう告げた。

「楽師の君の懷に帰られよ。月天子殿は休まれている」

「わ…わたくしは…何かお役に…。そ…それだけですわ。月読様に、歌でも…」

「要らぬ」

必死に取り繕う那羅姫に短くも打ち据えられた拒絶の言葉は、大いに自尊心を傷付けられた様で顔を覆い、涙に暮れて立ち去ってゆく。その背に浴びせた帝釈天の声が届いたとすれば如何したか、しかし別段面白くもないと鼻を鳴らし、忽然と消えた配下の神將に下した処分は非情そのものだった。

「使い物にもならぬ存在は、この諸天中王（帝釈天）には不要だ」そして、静寂の中に蠢き出した謀は此処に、新たな神話を刻むのだった。

姫君にあらうことが、息を切らせて只管に求めるは身の安全たる庇護下に戻ることであった。しかし諸天中央が居城・善見城に於いてその道は長く、果てしない。

随分と月輪の間から離れた心算だったが振り返ればあの怖ろしい気配が未だ感じられる様で、乾闥婆の歌姫・緊那羅は堪らなかった。

「…何ということ。如何したら—」

震える身体を抱き、知らず零れる言葉に更に動揺する。

これではいっそ、その場で斬り伏せられていた方が余程ましだったと思うのは当然か、今更ながらに帝釈天の怖れられる謂れに気付いた様だった。

時の帝が統べる理想郷で力に依って存在を得た神—それは余りに強大で、且つ残虐非道な振る舞いさえ天に赦された神。

玉座を狙うなどという謀を企てる正にその場に居合わせてしまったことを嘆き、那羅姫は途方に暮れるばかりで在った。

「最早、この身は風前の灯火。…ああ、このわたくしが—」

帝釈天を慕う情が月輪の間に向わせたただけだと、唯それだけだったと何故云えなかったのか、月読の為だと云えば歓迎されるとばかり思っていた浅はかさはしかし女性神らしく、主の乾闥婆ならば優しく微笑み許してくれるだろうと縊る。

「主様。—ああ、乾闥婆様…。お助け下さいませ」

慌てふためき扉を開くなり、楽園都市随一と讃えられる美声を震わせ那羅姫は、自らと等しく連なる主の姿を求めた。

乾闥婆は、玉座に仕える天の楽師として居城を構える程の存在だった。御手から紡がれる音色は全ての楽器において光音天を創り出すとされ、《光曜天》とも呼ばれていた。即ち共に光の神で在る二柱の《旧神》の、眷属だ。

「如何した那羅姫」

取り乱す歌姫と真逆に落ち着き払った声で尋ねる楽師の胸に飛び込み、その温もりを感じて漸く安堵したか、深く溜息を漏らして瞳を閉じる。

「怖ろしゅうございました。この声も失う程に……。ああ、でももう大丈夫ですわ。主様の胸に戻ったのですもの……。如何に諸天中央様といえど、天の楽師で在られる乾闥婆様に害を為すことなど出来ませぬ故」

帝釈天を慕いながらも那羅姫は、己が主をも求めるという欲の強い女性神だったのだ。そして、楽師の姫君は声だけでなく、艶やかな色香漂う肉体美でも知られていて、情事の際の唄は又格別と多くの神が求めてやまないのだ。

「抱いて下さいませ、乾闥婆様。如何かわたくしの怖れを取り払って下さいませ」

「善見城でか？」

「構いはしませんでしょうか？」

身をくねらせて豊かな胸を押し付ける様に、歌姫は誘い始めた。

乾闥婆に仕える者等が赤面し、退室を願い出るがそれを許さなかったのは那羅姫だった。主の上に覆い被さる様にして跨い、自ら裾をたくし上げて艶かしい肌をありありと魅せ付けこう云った。

「お前達も、わたくしの怖れを癒しておくれ。さあ、この手をお取りなさい」

願ってもいない歌姫の招きにしかし応えられる訳もなく、従者等は主の顔色を恐る恐る窺った。

此処で那羅姫の機嫌を損ねても、天の樂師の怒りを買うことになると分かっているのだ。が、かと言ってでは求めに応じれば、それはそれで余りに畏れ多いことと、天に住まう同じ神の一族で在りながら存在の違いに嘆く者等は弁えというものを、主から宛ら調教の様に、身をもつて教え込まれていた。

「何をしておる。早う指を舐めよ」

「待ちなさい那羅姫。その前に、何があつたかを云うてみよ」

招かれし城において情事に耽るは些か如何かと氣に病む、というよりは、確かに感じた歌姫の怖れに興味を持ったという様な節で乾闥婆は問う。それは、生半なことでの歌姫が震え上がるなど到底あり得ぬと踏んでのことだ。

愉しみを先送りされた那羅姫だったが、主の性格は把握しているのか渋々（しぶしぶ）事の次第を口にした。怖ろしくも愚かな謀は、こうして諸天中央・帝釈天が全ての咎を背負う形で唄となる。

「わたくし、確かに耳に致しましたの。玉座を狙うと…。これは謀反ですわ、乾闥婆様。それを聞いてしまったわたくしは、諸天中央様に殺されてしまいます…。如何したら…。ああ、怖ろしい…。このわたくしが、無惨にも斬り棄てられるなど…」

「ふふ、それはあるまい。諸天中央がその氣なら、今此処にそなたはおらぬ」

乾闥婆の意見は最もだったが、那羅姫はあの冷やかな笑みを忘れられなかった。まるで相手を凍り付かせる様な、そして粉々に砕く様な視線。口元の笑みは更に心臓を喰らう前の、邪神の如く様子。美しいこの身体を引き裂き滴る血を啜る、そんな帝釈天の姿が容易に想像できると歌姫は頻りに瞳を潤わせるが、それは直にも熱を帯びたものへと変えられた。

「あ…ん」。乾闥婆様…。いきなりですね。もっと、慣らして

「要らぬだろう。よう濡れておる」

自らに跨る那羅姫の泉に前触れもなく先端を含ませそう云うと、

細い腰を掴み回し始めた。擦られる熱が新たな快感を引き出し、捻じ込むまでもなく全てを飲み込んでゆく。零れ落ちる溜息は只管に甘く、目の当たりにした従者等はそれだけで頸を擡げ出す欲情を抑えるのに必死だった。

「は、あつー。其処…」

最早己で腰を使う歌姫は淫乱にも導き出した箇所にも身悶え、上気した頬に笑みを浮かべる。白い脚は執拗に主の身体を挟み、己が身を支えては力を抜く。

やがて、激しく上下に揺れ出す那羅姫はそのまま先に、絶頂を極めた様だった。しつとりと唇から覗かせる舌で誘う様子は愛染明王宛らか、そうして数多の神々を誘惑しては虜にさせる。

「乾闥婆様…。ねえ、もつと、唄わせて下さいな…」

身の中で締め付け強請られれば如何な神とて否とは云えまい。

「はしたない姫君だ。銜えて放さぬとは…」

そう云いながらも引き抜くことなく深く沈めたままに味わう乾闥婆が唇を合わせれば、自然傾ぐ身体で再び火を点けられた那羅姫が声を響かせると知っていた。

「そなたの美声を引き出すも私の才。存分に唄うがよい」

「あ、あ、あんつー。いい、乾闥婆様…。素晴らしいですわ」

下から突き上げ那羅姫を捕らえる楽師の手に依って奏でられる甘く淫らな唄が広い室内に響き渡り、先程とは打って変わった動きで攻め立てる主に更に悦びを露にする。身を襲う怖れはこうして癒された歌姫だったが、次には溢れる疼きに苛まれる羽目に、自ら進んで陥ったのだった。

ひとしきり燃えた後、一糸纏わぬ歌姫を寝台に残して乾闥婆は独り部屋を出た。未だ余韻に浸るか那羅姫は黙ってその姿を見送っていたが、熱い視線は誰ともなしに次の相手を探している様にも見えた。幾度となく身を貫かれ、受け入れた泉は溢れんばかりに満たされた筈が、過ぎ去ってしまえば只狂わされた我が身を持て余すばかり。

「…のう、お前達。わたくしを満足させられれば褒美を取らずが…？」

気だるそうに横たわりながらも白い胸を従者等にあられもなく見せ付ける。薄紅色に咲く花は愛撫を強請り、突き出したまま吸われることを待っているかの様だった。

目を逸らすことも出来ずに食い入る者等を誘いその様子を満足気に見詰めれば、最早理性を失くした凶暴さで我先にと甘い蜜を求めて群がるを母の装いで抱く。

「ほほ、愛おしいこと…」

再びの繋がりに期待を寄せる歌姫の美声は理想郷東光殿・天照の治める幻界にだけ息衝く鳥のさえずりを彷彿とさせたがしかし、淫猥な響きは閉ざされた扉を抜け乾闥婆の耳に届くと、何処にも聖性を宿さない音と成り果てる。

「…汚らしい女よ」

自らも存分に愉しんだ筈が、天の楽師は吐き棄てる様に呟くと一瞥し、赴く一室を目指して身を覆う長衣を翻し、歩を進めたのだった。

訪れを待つていたかの様に、その扉は開かれた。

諸天中央・帝釈天が住まう善見城の一室で、天の楽師・乾闥婆は楽を奏でる為ではなく、真意を確かめる為に目の前で寛ぐ者に向って進み出る。

《新神》でさえも怖れを抱く相手に対しその様子は、楽師で在ることが惜しいほどに何処までも毅然として、御世を照らし出す光の神の眷属で在ることを象徴していた。

「お寛ぎに一曲添えて頂ければ幸いです…」
如何切り出すかと思えば携えた弦の楽器を爪弾きこう云ったのだ。奏でられたは曲というものではなく、韻の調べであった。然しながら流石は天界・楽園都市一の腕前、響き渡る只の韻が、香しくも美しい力を放つ。

祈響元帥・月読を招く故にと召された筈が、一向に宴を催す装いも声さえも掛からぬことに乾闥婆は何やら察していた。そして先の歌姫の言葉から、やはり方便であつたかと確信したのだが、己が知る帝釈天にしては些か事を焦りすぎとも感じた。

そして何より玉座を狙う謀の割に、余りに無防備過ぎたのだ。

「何時聞いても楽師殿の手は素晴らしい。正に、月天子殿の御心を慰めるに相応しいと云える」

悠然と構え、帝釈天は目を閉じて耳を傾け云った。その眼に何を映すのか、傍らに控える多聞天も想像するが的を得ることは決して出来ないだろう。それは偏に、既に偉大なる生命に依り謀られていたからだ。

「お褒めに預かり恐悦至極に存じます」

控えめながらも乾闥婆は当然と言葉を賜る。楽においては右に出る者のいないことを、自らが覚っているからだった。

「祈響元帥殿は何処に？」

徐に投げ掛けてみれば帝釈天の代わりに多聞天が口を開いた。

「かなり御疲れの御様子。今暫くは御休みになされるでしょう」

「それは、お勞しい。如何でしょう、この乾闥婆が直接樂をお聞かせしては――」

密かに探る目付きで窺えば、「歌姫よりは害はなさそうだな」と随分あつさり許可が下りる。僅かに驚いたが、何食わぬ顔で乾闥婆はその場を切り抜けた。そして、

「では、諸天中央様に奉じた後、お伺い致しましょう」

と静かながらも勇壮な武曲に転じると、奏でる先から尊き神の言霊が清浄なる光となる天上三界の内、色界第十三の光音天を導き出す。是にも流石と帝釈天は眼差しを緩め、導き手・乾闥婆を褒め讃えたのだった。

その慈悲に、大いに驚愕したは他でもない、乾闥婆だ。

帝釈天にあるうことが、光の神・天照の輝き。一切を限り無い無量光で照らす天の二柱が一、理想郷東光殿は、月読の対と称される

《旧神》で在った。

《新神》の、武神で在る帝釈天とは存在そのものが違う生命の時を何故に見せるのか、天の楽師は危うく手元が狂い掛けるのを上手く繋いだが、それにさえ微笑む者に知らず畏れを抱き始めていた。やがて、武曲は終わりを告げる。最後まで途切れることなく奏でられたことに深い安堵を覚えたは初めてと、乾闥婆は胸を撫で下ろした。

「楽師殿、大儀であつた」

帝釈天の言葉を聞き、深々と頭を下げる。そして再び向き合つた時には既に、血で血を洗う武神、怖ろしく無慈悲なる諸天中央の存在に戻っていたのだつた。

「月天子殿は月輪の間だ。光音天に於いて疲れを癒されよと伝えてくれ」

そう云うと、多聞天に何やら耳打ちした。しかし乾闥婆は計ることが出来ず、又新たな疑念に苛まれて事の真意を確かめるどころではなくなってしまうていた。

「—ああ、分かつた。では早速手配しよう」

多聞天の声に漸く我に返り、なるべく平常心を保ちながら言葉を紡いだ程だ。

「…ひとつ、謝罪を致さねば。我が歌姫が何やら無礼を働いたとか。真に以つて申し訳なく…。この乾闥婆に免じてお許し願います」
恐らくこれで、既に事が我が耳に届いていることを帝釈天は気付くだろうと思い、俄かに己をも駒にしよう企みかとも想つた。楽師が出来たことは知れているが、直接命の危険を齎さないという相手の油断と情報を得るには上策だ。

跪く乾闥婆とそれを見下ろす帝釈天の視線が合えば、最早言葉は要らなかつた。

本よりこうして合間見え、楽を奏でられたは帝釈天に咎める心算がない訳で、歌姫が斬り棄てられずに我が許へ戻つたは即ち事が露見するを見越してのこと。

故に、全てが覚悟の上だと、詰まりはそういうことだと乾闥婆は視た。

すれば自然、昂る情に驚きを隠せなかった。之程までに強い意志を示す帝釈天に付き従うことを望んでいる己がいると、自覚してしまつたのだ。

「この上は、如何なるご命にも従う所存」

自らの覚悟の程を確かめるには祈響元帥に対する所業が手取り早いと乾闥婆は策を練るが、帝釈天の応えはこうだった。

「月天子殿を癒せばそれでよいわ。折角だ、楽師殿も楽しまれよ」
詰まりは未だ、祈響元帥に手を出すなどの解釈が妥当かと、内心玉座を狙うという謀にしては手緩いと思った。が、今は従うしかないだろう。

「承知致しました。では早速、赴きましょう」

漸く退室した楽師を本心では如何扱う心算なのか、しかし帝釈天はそのままに見送りもう一度多聞天を呼んで次にはこう云つたのだ。

「善見城より決して逃すなよ。外は、危ないからな」

喉の奥で笑いながら、まるで幼子を庇護するかの様に云う帝釈天に、多聞天は「確かに」と何を納得してか肯定していた。

「確かに、御身が狙われているとも知らずに監禁される月天子殿は哀れですな」

「さてさて、監禁ではない。軟禁だ」

無理矢理連れて来て何を云うかと溜息を吐き、それでも多聞天は好きにさせた。

永い付き合いで何を云つても聞かぬと承知していると、若しやこれは諦めかも知れぬと苦笑する。だが、一度途を決めれば必ず成し遂げる強さは誰も敵いはしない。

多聞天が常にこの帝釈天を誉れと思うは其処だった。

そして目に見える強さは内に潜む優しさを隠してしまうのだろうが、御世の安寧を願う慈悲は確かに帝釈天にも在るのだと知っていた。だからこそ、共に起つのだ。

「理想郷は最早、生命の手を離れた。ならばこの帝釈天が新しき御世を築こうではないか。只流されるばかりでは、詰まらんからな」
眼下に見える樂園都市を見詰め、誰ともなしにそう云う帝釈天の表情は何処か寂しげだった。しかし多聞天に背を向けたままだった為、若しくはだから浮かべた情なのか、述べた言葉に隠した真意も気付かれることはなかったのだ。

事の起こりは創造神・天輪王になろうと企む無能勝明王・阿氏多の謀。それは願いを祈りで叶える祈響元帥・月読を捕り込み、理想郷を我が物とせんとする、浅はかな企てだった。

御世の安寧を守護する諸天中央・帝釈天はそれを知ると、阿氏多よりも先に月読を善見城へと連れ去り其の身を預かることとする。其処には密かに交わされた密約が存在するのだが、其の相手が誰で在るかは今のところ、当事者と多聞天しか知らない。

善見城の一室・月輪の間で漸く起き上がれる様になった月読は、静かに佇む者の気配に怯えた。

「ご安心を、祈響元帥殿。わたくしですよ」

落ち着いた声の主に安堵してか、この城へ連れて来られて初めて笑みを見せた。

「光曜天殿…。久方ぶりですね」

天の楽師・乾闥婆をそう呼ぶは、月読等《旧神》が主だった。

「ご無沙汰しております」

この様な処遇でも、こうして久しぶりに交わす微笑みが、月読は嬉しくあった。

参

参

「光曜天殿……。久方ぶりですね」

「ご無沙汰しております」

「直接こうしてお目に掛かるは何時以来でしょう……」

そう云う月読の素直な喜びに苦笑する楽師だったが、確かに同じ宮中に仕えているとは言ってもすれ違いばかりで、同じ場に列席することは本当に稀だったのだ。

それは月読が高位に在ることと、其の職務故であると恐らく共に気付いているのだろうが、敢えて云わぬはお互いの労わりからなのだろう。

「この場を設けて頂けたこと、諸天中央殿には感謝致します」
しかし楽師のこの言葉には、如何しても頷くことが出来ない月読だった。

俄かに藍色の小宇宙が陰りを見せ、そして其のまま俯いてしまう。
「如何されました？何か、不都合でもございましたか？」
「いえ……」と儚い表情で答えるが、是ではそうだと云っている様なものだ。楽師は微笑んだ。

「諸天中央・帝釈天は、ご存知の通りの気質。些か目に余ることもございましょうが、何卒ご容赦下さいませ」

天の楽師としての今の地位を、是又自らで手に入れたも同然の乾闥婆がそう云っても何の説得力もないのだが、同じ《新神》を庇うだけではない何かがあるのだろうと月読は察し、仕方なく頷いた。

「暫く、此処に居て頂けましょうか」

乾闥婆が奏でる韻が塞いだ情を慰めてくれればと、月読は願い出る。

「お望みとあらば、喜んで。お耳汚しに一曲如何です？」

「御謙遜を…」

理想郷に天の楽師とは乾闥婆であると名を馳せる者の云い様に思わすくすりと笑う月読は、古よりの光の神なのだ。

天の楽師が創り出す《光音天》は乾闥婆が其の眷属で在るが故、即ち月読に、その才の何たるかが解らぬ筈がない。

やがて編み出された韻の調べに心地好く身を委ね、無防備にも小宇宙を閉じて聞き入る祈響元帥の様子を窺う乾闥婆は、瞳の奥に監視者たる装いを醸し出していた。

だがそれを綺麗に隠す《光音天》は、此処においても優に創り出されたのだった。

その清らかな時空で祈響元帥・月読は、一時の安らぎを覚える。やはり同じ波長の力は何の違和感なく伝わるのか、光の中に漂うままに其の美しき御姿をより一層輝かせた。

普段でさえ淡く煌く御光は、今では眩い程の彩りが安らぎを湛えた微笑に添えられ、乾闥婆は我知らず魅入ってしまった。

諸天中央・帝釈天が玉座に着くには祈響元帥の存在は必要不可欠なのだ。

そしてこの《旧神》を従えるなれば、他の生命も否を唱える事はないだろう。

御世の未来を読むに等しい《星読》の力と願いを叶える力が手に入れば、懼れるものなど何一つとして存在しなくなる筈だと、乾闥婆は改めて思い知った。

理想郷に神族として存在しながら《旧神》と《新神》の違い。それは天に授けられた力と時の違いなのだ。それなのに、

「我は時折、あなた方を羨ましく思うことがあります」と云われれば、意を解せなくなる。

「…何故でございます？」

天の楽師は手を休めることなく韻を響かせながら、そう問うしかなかった。

静かに小宇宙は乾闥婆を捉え、心の内を暴くかの様に見詰める。

偉大なる生命^{かみ}にして宙に浮かぶ月輪を神格化した存在は、其処^{そこ}に又ひとつの小宇宙^{ちから}を抱く。其れは一介の神には到底計り知れぬ、強大なる時の成せる技か、命と命を繋ぐ星の宿主は不死を与える蘇摩を映す己^{おの}が小宇宙^{ひとみ}を憂いに染めてこう云った。

「天の縛りを享^うけず、未来に抱く願いのほんに、力強いこと…。全ては宿命^{さだめ}と我^{わたし}には受け入れるより他術^{すべ}は無くとも、あなた方は、運命を自らで描くことが適^{かな}いでしょうか。それが、羨^{やうい}ましくあるのです」

まさか《旧神》から羨^{やうい}ましいなどと云われるとは思っても見なかった乾闥婆は、其^その言葉を真に理解することが出来なかった。

いくら望んでも手に入らない時を天から授^{さず}けられながら、其^その存在を元から赦^{ゆる}されながら、運命を切り開く事の如何^{いか}に容易でないことをこの《旧神》は羨^{うらや}ましく思うなど、《新神》で在る乾闥婆が腹立たしく思っただは仕方ないのかも知れない。

「…余り、多くを望まれるは如何^{いか}かと」

その言葉にはつと表情を変えた月読だった。

「新神^{われら}からすれば、祈響元帥殿^{ききようげんすい}、あなた方《旧神》の存在程羨^{うらや}ましいものなどないということ、お解^{わか}かりでしょうか？望まずとも与えられた時^{ちから}を新神^{われら}は己^{おの}が手で掴み取るより他無いのだと、あの聖戦で思い知らされたのですよ？其れ^そは決して手に入らぬ、時^{ちから}なのだということを――」

何時^{いつ}になく強い口調で韻^{おと}に乗る乾闥婆の言葉は、月読を大いに苛^{さいな}んだ。

それは同時に《光音天》からの覚醒^{かくせい}ともなり、再び善見城の一室月輪の間への戻りを告げる。光に包まれた癒しの空間は跡形もなく消滅し、月読^{つくよみ}の為に設えられた絢爛^{けんらん}たる輝石が冷たい輝きを放つばかりとなる。

「光曜天殿、あなたも時^{ちから}を望^{もち}めますか？」

其処^{そこ}に代わって響いた韻^{おと}は、儚^{はかな}い祈響元帥^{ききようげんすい}の言葉唯^{ただ}一つであった。暫^{しばし}くの沈黙の後、天の楽師は応えを紡ぐかの様に弦を鳴らした。

そうすること

今の己には自らで掴んだ力が在ると、月読に知らしめる。

「…諸天中央殿は、時を望まれますか？」

次に齎された言葉に思わず手が止る乾闥婆は、月読を凝視して「なれば如何します」と尋ねた。

返答如何では帝釈天の玉座は確たるものとなる、そう思えば逸る気持ちに蓋をして月読の言葉を聞きだす時は、永遠にも等しく感じられた。

目の前に佇む月読がふわりと美しき顔に微笑を讃える。其れは、理想郷に於いて唯一未来を読むことの出来る祈響元帥としての微笑みで在った。

そんな頃、青い顔をして少女は主・月読の居城で途方に暮れていた。

受け取った書状には主の居場所が記されていたが、如何にも腑に落ちない点が幾つか思い当たる。それは、一度決めた事を安易に覆す主ではなかったからだ。

「如何しよう…。相手が相手、私では月読様をお迎えにも行けない…」

悔しそうに可憐な唇を噛み締めてそう呟き、少女は大きな瞳を潤ませた。

主・月読は、はつきりと帝釈天の誘いを拒否したのだ。其れが与える影響に怖れることなく常に凜と佇む存在は、少女にとって掛け替えの無い主神で在り、御世に尊き二柱の生命のひとり。

「きつと、無理矢理連れ去られたに違いない。畏れ多くも月読様を…。おのれえ、諸天中央が何だ！この瑠璃が今に目にモノ見せてくれるわ！」

「―。勇ましいな。何事だ…」

「や…やだ、あのく。其処に居たの…」

天高く両の握り拳を上げて力んだ少女の様子を、丁度通り掛かつ

た龍王のひとりあのが見咎め声を掛けた様だ。

自らで瑠璃と名乗った少女はまさか此処に誰か訪れるとも思わず、勢いに任せて叫んだ醜態を見られて白い頬を染める。

「何でもないの、気にしないで」と取り繕いながら、さつと後ろに両手を隠す慌て振りが更に可笑しく、あのと呼ばれた少年は肩を震わせた。

そのあからさまな態度に只でさえ怒りが込み上げていた少女は堪えきれず、八つ当たりだと分かっているにも噛み付くかの様に文句を言った。

「な……何よ、失礼ね！あのがなんか何にも知らないくせに。大体、何で此処にあんたが居るのよ？北の住処はどおなってるのよ！」

「悪いがお務めでね。これから宮中に赴くんのだ」

「ふん！だったら佐々（さつさ）と行きなさいよ。お務めご苦労様、あのが龍王さま……」

まるで嫌味とばかりにそう言うは、実は瑠璃とあのが幼馴染であつたからだ。

共に同じ学舎で育ち、瑠璃は月読の許へ、あのがは八大龍王のひとりとして少年の身で在りながら、此れより北の地の池に住み、水難から御世に息衝く命を護っているのだ。瑠璃が言つた北の住処とは、その守護における要所のことだ。

「ついでに立ち寄つたまでのこと。お取り込み中失礼——」

龍王という立場からの余裕が若しくは幼馴染に向ける親愛の情か、あのがは瑠璃の態度を一向に気に留めもせず、飄々（ひょうひょう）とそう言った。

「ついでですってえ。馬鹿にして！」

「とんでもない。勇ましいお方を敵にする程愚かではありませんよ？」

ははは——と乾いた笑いで返答する少年に理性の箍が吹っ飛んだ少女は怒りの拳をやはり天高く振り上げていた。何処を如何見ても、幼馴染同士の他愛もない喧嘩だ。

適当に相手をして適当に逃げ回るあのくに何時しか、いや、初めから慰められていたのだろ。頃合を見計らって捕まった少年の胸に顔を埋め、少女は堪えていた涙を零したのだ。

「…如何した？何があつた？」

細い肩を包みながら、以前と何ら変わらない眼差しであのくは問い掛けた。しかし、何を何処まで話してよいのやらと思案する瞳は清らかな涙で溢れ、口籠ったままの瑠璃に仕方なく、こう言った。

「さては、祈響元帥様に愛想を付かされたか？」

「―馬鹿あ！」

小さな拳で胸を叩かれあのくはくすりと笑う。憔悴きつていよりも余程マシだと、態と悪態を吐いたのだ。

「馬鹿！あのくの馬鹿！…でも…その方がよっぽどましだわ…」

やはりただ事ではないと踏んだあのくはもう一度、「何があつた」と問い掛けた。

「月読様が、攫われてしまったかもしれないの…」

「な…に？」と聞き返す龍王に、瑠璃は必死で訴えた。

「諸天中央様に…。きつとそうだわ。如何しよう、あのく―」

「一寸待て。落ちて着け瑠璃。もう一度初めから、解る様に説明しろ」

事が事だけに、あのくは慎重に成らざるを得なかった。

祈響元帥・月読が攫われるなどという事がこの御世であつてよい筈はないが、平定されたとは言え未だ悪鬼の類は蠢き、尊き生命を狙っている節は窺えた。

それらを鎮め、又狩るが務めでもある守護神将の総大将・帝釈天が祈響元帥を攫ったとは些かも信じられることではないが、かと言って瑠璃を疑う訳ではなかった。

幼き頃より見知る少女は利発で、月読直々（じきじき）に望まれて仕えるに至つたのだ。

この稀なる拔擢にしかし、瑠璃は裏切ることなく職務をこなしている。遠く離れた北の住处であのくは何時もそれが嬉しく、自らの

励^{はげ}みともなっていたのだ。

促^{うなが}されて、瑠璃^{るり}は徐^{おもむろ}に経緯^{いきさつ}を話し出した。

「何時^{いつ}もの《星読》を無事終えられて、月読^{つきよみ}様は月宮^{つきみや}天に御戻りになる御心算^{つもり}だったのだけど…。私、諸天中央様からの文^{ふみ}を預かっていたものだから、一応、如何^{どう}されるかと伺^{うかが}いしたの」

「…それで？」と先を聞き出すあのに瑠璃^{るり}はきつぱりと言った。
「勿論、御断りする様に仰^{おお}せ付^つかったわ。だって、あのかも知^しつてるでしょ？近頃の宮中での流行^{はやり}、お誘いの意味…。よく恥^はらしいもなくあんなこと…」

其処^{そこ}まで言うと、少女は耳まで赤く染めた。

流石^{さすが}に側近を務める瑠璃^{るり}には渡された文の内容が把握出来る様で、そうでなくとも敏感な年頃故^{ゆえ}か、その文が所謂^{いわゆる}色事の誘^いいだと判^{はん}じると大いに怒りを露^{あらわ}にした。

「しかし、相手は諸天中央様。色事が目当てだとは想^{おも}えぬが…」

あのかは冷静に、本当の目的を見定めようと試^しみた。が、間髪^{かんぱつ}入^いれず目の前に差し出された瑠璃^{るり}の人差し指と、その後ろから迫^{せま}り来た大きな瞳にたじろぎ、如何^{どう}もこうもなく思考は途切れてしまう。

そしてその代わりに瑠璃^{るり}の、何とも可愛^{かわい}らしい心配事に付き合^あう羽^は目^めに陥^{おち}ったのだ。

「甘いわ！諸天中央様だからこそよ。何もかも全て、己の意^いの儘^{まま}に為^なさろうと企^{くわ}てたのよ。―何しろ月読^{つきよみ}様だもの…。目^めは確^{たしか}かだわ」
内心^{うちしん}「おい…」と呆^{あき}れつつ、しかしながら瑠璃^{るり}の主^{あるじ}・祈響^{ききよう}元帥^{げんすい}の美^みしき御姿^{みすがた}を脳裏に浮かべれば、得心^{とくしん}もいく。

御世^{ごせい}に稀^{まれ}なる《旧神》で在^まり、月輪^{りん}の淡く清らかな光を纏^{まと}った様^{さま}子^こは何処^{どこ}までも凜^{りん}と冴^さえ、そして飽^あく迄^{まで}も憊^{はかな}いのだ。

麗^{はくせき}しき白皙^{はくせき}の美貌^{みぼう}に藍色^{きいろめ}に煌^{きらめ}く小宇宙^{ひこみ}、豊かに流れる黒髪は絹^{きぬ}の如^{ごと}くしなやかに細い身を覆^{おお}い、非^ひの打ち所ない立ち居振る舞いは優^{やさ}美^みでそして、雅^{みやび}であつた。

時の帝の覚え目出度^{めでた}き月天子は、御世^{ごせい}の二柱と称^{なづ}される光の生命^{かみ}永^{とこ}久^{しえ}の安寧と繁栄を祈^{いの}り、理想郷に響^{ひび}かせる月読^{つきよみ}の願^{ねが}いこそが御

世を護る最大の結界となるのだ。故に、其の時は全てに不死を与え
ると謂われ、誰しもが欲する。

あのくは諸天中央・帝釈天が其の蘇摩を手に入れる為に、延いて
は御世を手中にする為に、祈響元帥・月読を我が者とせん事を企て
たと懼れたのだが、しかしこの幼馴染はそうではなく、詰まりは主
の貞操を、如何やら案じているだけの様だった。

「まあ、そういうことなら」と溜息混じりに呟く。

「命の危険は無さそうだな。どちらにせよ、祈響元帥様が長く
宮中を空けられる訳にもいかないだろうし、とにかく情報を集めて
みるよ。だから瑠璃もえっ…？」

月宮天に、小気味いい乾いた音が響いたのは、直後だった。

「…な、何するんだ。酷いじゃないか」

「五月蠅い！もおいいわ、分かった。あんたなんかを当てにした
私が馬鹿だったのよ…。こうなったら直接善見城に乗り込んで、月
読様をお助けするわ。待つてなさい帝釈天っ。瑠璃が相手よ！」

「ま…待て、待てよ。早まるなって！瑠璃ちゃんお願い、落ち着
いて―」

理不尽にも平手を喰らったことなど最早この際二の次に、あのく
は必死に燃え盛る少女を諫める。

万が一にも瑠璃が諸天中央の居城へ乗り込んで、無事で在る筈が
ないと慌てふためくあのくは誰よりも、この幼馴染の気の強さを知
っていたからだだった。後先考えない只の愚か者ならば放っておく
だが、怒りの理由が偏に主を思えばこそであれば、此処で何として
も収めなければ寢覚めが悪すぎる…。

全く以って仕様が無いと、あのくはきっぱり諦めることにした。

「―解ったよ。僕が行くよ。だから大人しく待つてろ。ヤバそう
だったら適当に理由付けて、何とかするからさ。だから間違っても、
瑠璃は此処を動くな。いいな！」

「…本当に？大丈夫？」と疑いの眼差しで聞かれ、僅かに言葉に
詰まる。

「うつ…。多…分…。きつと…。恐らく…」

勘弁してくれと視線を外せば、今度は泣き落としとばかりに瞳を潤し、情けない声で「あのくう…」と漏らす。

「で、出来る限り、力は尽くすよ。―間に合えばいいね、瑠璃ちゃん…」

その言葉を最後に素早く少女から離れたあのくの判断は正しかった。

大地を轟かす様な感情の高まりが、可憐な少女の身体から見て取れる。己でも一言余分だったかな、と思った矢先この有様では、近くに居たなら平手では済まないだろうことを察知して空に飛び出したのだ。

あのく龍王としてはそれこそ情けないのかも知れないが、如何せん手に負えない何かしらは皆一つくらい持ち合わせているだろう。それが只、自らはこの幼馴染の少女で在るだけだと半ばいい訳染みたことを思いながら、とにかく行き先を変更した。

「別に、宮中へは急ぎの用でもないしね。…務めは務めなんだけど、瑠璃？」

解ってるのかなあ、と振り返りそう苦笑するあのくの視界に、既に少女の姿はなかった。それでも瞳に焼き付いたあの表情は、ほんの幼い頃から変わらない。

正義感が強く、面倒見もいいことから学舎では常に皆を束ねる役割に在った。

学の才も秀でていて、誰も知らないことを多く知識として持っていた。

頼られれば嫌とは言えない性格が災いし、結構面倒事に巻き込まれもしていた。

だが、あのくはそんな瑠璃が誰よりも努力家で、誰よりも負けず嫌いで、そして誰よりも純粋な情の持ち主だと解っていたのだ。だからこそ祈響元帥の従者として抜擢されたのだろっし、当の月読がそれを望んだのだろっ。

「ま、些^{いさ}か気が強いところが玉に瑕^{きず}つてやつかな…」

そう呟^{つぶ}くが、何処^{どこ}にも幼馴染^{幼馴染}に対して負の感情は浮かばなかった。それよりも明るい笑顔が取り戻せるならばそれでいいと、今回は厄^{やっ}介事^{かい}に自ら足を踏み入れたのだ。

八大龍王のひとりとして己が動くは如何^{どう}かという懸念もあつたが、この際はつきりさせねばならないと覚悟する。それは本当に、瑠璃^{るり}が案^たじる只^{ただ}の諸天中央の懸想^{けそう}なのか、若^もしくは己が案^たじた謀反^{もくはん}のかを見極める必要があるからだつた。

「今回に限^{限り}つては、瑠璃^{るり}ちゃん^{ちゃん}の心配事で終わってくれればいいんだけどね」

と僅^{わず}かに呻^{うめ}く様に呟^{つぶ}いた頃、あのくは最初の通過点に辿り着いた。諸天中央・帝釈天が居城、善見城への謂^いわば入り口か、大氣の流れる空間に張り巡らされた結界の門。此処^{ここ}を無事抜けなければ、辿り着くことは愚^{おろ}か再び戻ること出来ない時空と時空の狭間^{せま}でもある。

理想郷^{理想郷}の最^{さい}たる要所、楽園都市の中心、詰まりは時の帝が座す玉座^{玉座}が在る宮中を護る要塞^{ようさい}が善見城という訳^{わけ}なのだから、簡単に進めること事態^{あか}可笑^{おかし}いのだ。

あのくは細心の注意を払いながら、微^{かす}かな大氣の流れに気を取られない様に唯^{ただ}一つの路^{みち}を只管^{ひたすら}に進んだ。

此処^{ここ}へ赴^{おもむ}くのは初めてではなかったが、先触れもなく訪れることは確かに初めてだ。それが何を意味するか、身を以^もって実感する。

闇^{くろ}に蠢^{うごめ}く魑魅魍魎^{ちみもつりよう}、悪鬼^{あく}の類^{るい}から諸神・善神全てが入り混じり、あのくの進む路^{みち}の両側から何と、手招きしては誘^{いざな}うのだ。

些^{いさ}細^{さい}なことで無視出来る程、それは易^{やさ}しいものではなかった。

八大龍王のひとりといつてもあのくは未だ少年の身で在り、御世^{なご}を永く渡った神ではない。瑠璃^{るり}の手前何とかしてやりたいという願いはあつたが、高が善見城への入り口で身の危険に晒^ひされることになるうとは思^{おも}いも寄らなかつたのだ。

容易^{もしや}ならざる事態に己の甘さが身に染みる。が、最早^{もはや}後戻りは出

来ないのだ。

しかしこのままでは、結界を抜ける路は今にも見失うと解るからこそ焦り、そして懼れる。既に諸天中央の領域に在る以上、龍王の力も役には立たないのだ。

「本気で不味いかも…」

そんな弱音を吐くあのくの袖をつんと引く影に到頭、捕まってしまった。だがそうと知る頃には全てが遅く、此处にあのく龍王は悪鬼と化す運命となった。

「何を難しい表情してるのよ」

「えっ…！。瑠璃？」

そう。渦巻く暗黒の時空より突如現れたのは、紛れも無い幼馴染だった。

「なんで？お前…大人しく待ってろって言ったじゃないか…」

「何よお、それ。困ってそうだったから助けてあげようと思ったの。…路に迷ったのでしょうか、あのく。ほんつとに世話が焼けるんだから」

くすくすと屈託のない笑顔を見せる少女は、つい今し方までの様子とは打って変わって、何の不安もない晴れ渡った心をあのくに寄せて来る。正にその笑顔を願い、此处まで来たあのくにとって何よりも、護りたいものだったのだ。

「こっちよあのく。いらっしやいな」と招いては遠ざかる少女の姿に我を忘れ、唯一つの路から足を踏み出すそれは一歩手前だったのか、少年の耳に届いた言霊にふと、意識が戻る。すれば自ずと手招きする少女の正体は知れるというものだった。

凍り付いた様に立ち止まった少年に僅かに首を傾げ、それでも何一つ変わらない幼馴染の姿で誘う影に、驚愕と怒りが込み上げてくる。

「貴様…よくも…」

「―嫌だわあのく。如何したのよ？」

「よくも…瑠璃の姿で…」

そう言う少年に、しかし声も、その笑顔もそのまま大切な少女のもので語り掛ける影。それは時空に歪に墮とされた、不確かな命。

「滅せよ化物！最早このあのかく龍王にその存在は通用しない！我が太刀にて葬り去るは、この期に及んで望みはせぬ！」

「ふん。邪魔が入ったか」

此れまでと、影は邪惡な念を浮き彫りにそう云った。しかし理想郷に在る命においてそれと手出し出来ぬは輪の宿命か、あと僅かで手に入った確かな命を惜しむ様に、不敵にも置き台詞を残したのだ。

「強がつて居られるも今のうちだ。御世が彼の神の手に渡ればお前なぞ、虫けら同然よ。精々（せいぜい）、足掻くがよいわ」

「なに？」その言葉に只ならぬ謀反の色を感じ取ったあのかは追求したが、それ以上は結局何も聞けなかったのだった。

寸でのところで結界の塵芥となるを回避した少年は、今になって身震いしていたことに漸く気付くと、氣を取り直そうと唇を噛み締める。そして、

「やはり、只の諸天中央様の懸想ではなさそうだよ、瑠璃……」

と呟く。それは影が残した言葉から、容易に推測出来る確かな謀反と判じたからだ。

信じられないが、「御世が彼の神の手に渡れば」とは詰まり、時の帝を廃し奉る企てが目論みられていると言って過言ではない。

御世の安寧を守護する筈の諸天中央が首謀者なのか、未だはつきりとは解らないが尊き《旧神》で在る祈響元帥を善見城へ攫ったらしいことから嫌疑はある。

「一体、如何いうお心算なのか、諸天中央様は……」

そう零すあのかだったが、全ては善見城へ辿り着かねば始まらない。

二度と影に惑わされることのない様にと、毅然と前を見据える少年の心には、微塵の懼れは跡形もなく消え去っていたのだった。

「諸天中央殿は、時を望まれますか？」

凜と冴え渡った韻は、天の樂師が今迄に耳にしたことのない、美しい音色だった。

己の対と称される歌姫・緊那羅の美声とは何を以ってそう云うのかと思う程、際立った祈響元帥の韻色。正に、祈りを響かせる生命に相應しい音の彩りは、そうして魂に直接大いなる時を沁み込ませる様だった。

「なれば如何します」

努めて冷静に、乾闥婆はそう云った。

暫くの沈黙の後、祈響元帥・月読は儂くも美しい微笑を讃える。

御世に息衝く命の全てを癒す輝きは、天の二柱として闇夜を照らす月輪が化身。其れを敢えて知らしめるかの様に、乾闥婆に向けて放った煌きは心に巢食った闇そのものを暴き出すと慄かせる、清浄さに溢れていた。

「されば、我を宮中へお連れ下さい。全ては《星》が、それを叶えましょう」

よもや月読の言葉に偽りはないだろうが、諸天中央の許しなく乾闥婆が善見城から連れ出せる筈もなかった。

詰まりは我が身を捕らえた帝釈天から解き放つ術を、この乾闥婆と見なした様だったが、月読とて無事に逃げ果せるとは思ってはいまい。況して武神ではない樂師が何の力と成り得るといのかと、思いあぐねるばかりだった。

「我の時、お望みで在れば、差し上げましょう」と、如何かお伝え下さい」

しかし月読はそうとだけ告げると、「大儀でした」と美しき御姿を隠してしまう。

そうなれば乾闥婆がこのまま月輪の間に居座ることなど出来様筈もなく、致し方ないと席を立った。しかしその足取りは重く、常に腕に抱える樂器すら重荷の様に感じてしまうは何故かと、問わずにはいられない。

徐に振り返り、目を見張った。

月読は自らが抱く小宇宙に乾闥婆を映し、己の眷属で在る天の樂師が諸天中央・帝釈天の配下に下ったことを見抜いていたのだ。

「祈響元帥殿——」

取り繕う間があったとは思えない。

月読の哀しみが如何に深いものか、其の小宇宙に浮かんだ乾闥婆自らが物語っていたのだ。照らし出された心の闇がより一層影を増し、其処から己を見詰めていた。

「祈響元帥殿……。如何か、私の話を……」

「最早、聞きとつはありませぬ。……出て行きなさい！ 光曜天——いえ、乾闥婆殿……」

悲痛な心の叫びが天の樂師の呼び名を変えて、月輪の間に木霊した。

気丈にも立ち尽くし、震える身を抱き締める月読の白晢の頬に、止め処なく伝う清らかな雫が足元に零れ落ちる。この偉大なる生命を慰めることなど、善見城に在る神には赦されなかったのだ。

己が存在の主で在る光の神に拒まれては、如何することも敵わないと乾闥婆は、恥じ入る様にその場を後にするより他術はなかった。独り月輪の間で崩れ落ちる月読に、差し伸べられる救いの手は未だ無い。

「……天照様」

涙に暮れる心が平んだ御名は唯ひとり。

「天照様……。天照様——」

永き時間を、共に渡った稀なる生命。

現在は理想郷東光殿と称される、天を大いなる無量寿光で照らし出す神。

「何故に、応えては下されぬのですか？」

しかし、既に合間見えぬ時は《那由多》とも云えると月読は思った。

理想郷に於いて時間は封じられ、永遠を約束されている。

では、其の永遠に若しも、無くしたままの存在が在ったとすれば

。 那由多―数にすれば十数億ともなるであろうか、きっと次の務めではとの淡い期待は叶わぬままに繰り返し、此処まで来てしまったのだ。

常に存在は感じていても、如何しても望んでしまうあの黄金の瞳に見詰められる至高の幸を、月読は浅はかよと胸に内にしまい込んで《星読》に臨んでいたのだ。

「せめて、一目…」

だが、哀れにも囚われの身と成った今、其れは叶う筈もない。

如何に輝石が光を放つ、絢爛たる装いの部屋に在ったとしても、光の時空を創り出す天の楽師の音色が奏でられたとしても、光其のもので在る生命の存在に敵うものなど有りはすまいと、月の雫を想わせる涙を惜し気もなく零す。

「我は、天照様在つての命…。それが―」

しかし、月読の嘆きは潰えることはなかった。

先と全く同じ様に、突然に開け放たれた扉に現れた姿に、怒りを覚える余裕は既に皆無と歸っていた。

「―涙に暮れる様子も麗しいが…」

今回は多聞天は連れず、ひとり赴いた帝釈天は云う。

「どうせなら、我が胸に抱かれて啼く方が美しかろう」

云うが早いか月読は腕を掴まれ、無理矢理に抱きすくめられた。

流石に驚き細い身体で必死に抗うが、其れをもともせず帝釈天は、奥の寝台へと手荒にも放り投げる。そして、己の身体で押し付け身を縛ると、蒼白になった顔を上から見下ろしそつと、耳元に熱き吐息で囁き掛けたのだった。

四

四

それぞれの思惑が交差する宮中で、偉大なる《旧神》の無量寿光が一つの影を捉えたのは実は、時間にして遙か以前だった。

それまでも確かに数多の企てが目論見られ、都度鎮圧されてはいた。

しかしそれは、御世の安寧を導く《星読》に依って暴かれたと言っても過言ではなく、無量寿光の主が示唆した訳ではなかった。

楽園都市祈響元帥・月読の大いなる時は《星読》に顕著に現れ、謀反の兆しを見逃すことなど有り得ない。そして又、如何なる願いも聞き届ける御心に、僅かにでも邪なる情が響けば忽ちに、事は公に曝される羽目になるのだ。

そうして先の聖戦の様な、正に時空を二分する虞からをも理想郷を護り、時の帝の御世を未来へと導く。《星読》は即ち《未来見》として、理想郷の永遠になくはならない時の一つだった。

魂を甘い夢に飛ばし、未だ覚醒る気配の無い儚い姿に諸天中央・帝釈天は満足気に目を細める。震える身体、熱い吐息、零れる涙、其の全てが麗しく、愛しい。

「――是は、其方と我の密事だ。努々（ゆめゆめ）忘れるでないぞ、月宮よ」

寝乱れた様子に再び沸き起こる情を苦笑し、耳元で囁く様にして唇を啄ばむ。すれば、微かに応える稀なる存在を彼の神は、慈愛で以って包み込んだのだ。

見詰める瞳が金色に輝いたのは、見間違いだっただろうか。

名残惜しくも艶やかな髪を二、三梳いて、帝釈天は寝台を離れた。足元に散らばる衣服を改め、脇に立て掛けてあった太刀を腰に戻せば鎧など無くとも武神の気迫が漲る。

何処どこを如何どう見ても天界一の闘神、悪鬼も恐れる帝釈天の姿だった。薄い灰色の瞳は何時いつも冷たく配下の神将を束ね、戦神の阿修羅でさえ跪ひざまずかせる。鍛え抜かれた体軀たいくは無駄のない均等の取れた筋肉で覆われ、見事な剣技を繰り出すに相應ふさわしい力を物語っている。

そして、見目良き風貌ふうぼうとくれば並み居る美姫達が群がるは必定なのだが、如何いかんせん残虐な性質ゆえ故、近付きたくとも中々思つようにはいかないというのが常であつた。

その帝釈天が月読つきよみを視る眼差しにだけ、深い情を煌きかせる。其処そこに宿るは慈しみの神としか想えない様子となるのだ。

しかし、古くから見知る多聞天でさえそれには未だ気付いていない。そして月読つきよみですら、それが何を意味するのかを判はんじることが出来ないでいたのだ。

細い身体で力の限り抗いを見せた、一時いつとき前。

藍色の小宇宙ひこみを涙で沈め、無慈悲にも引き裂かれる痛みなみに声なく叫び、最後まで心を開くことなく護り抜いた、唯一ただ一つの情。

「厭いや——」

「大人しく致せ、手荒な真似まねはしたくない——」

「……已やめなさい、諸天中央殿。無礼です！」

内掛けを掃われ腰紐に手が掛けられても、月読つきよみは気丈かなに敵いはしない力に抵抗したのだ。震える腕で必死に厚い胸を押し退のけ様と、帝釈天の腕の中でもがき続ける。

「……痛い——」仕方無しに両手を捻ひねり上げれば諦めるかと、訴えも聞かずに思い切り力を籠こめる。

しかし、月読つきよみは両腕の自由を奪われても屈服することはなかった。怒りと怖れの入り混じった小宇宙ひこみで帝釈天を睨にらみ、視線でも拒絶した。

「……流石さすがは誇り高き《旧神》よ。されど、其その気高さが仇となることもある——」

主導権を握る者の強みか、不敵にも笑みを浮かべてそう云いいなが

ら、熱い舌を首下に這わせる。

「…っ」そのまま味わう様に舐め上げた後、軽く噛んで見せれば白皙の肌に朱く痕が残る。まるでそれが証とばかりに鎖骨から、肩口から刻み込まれてやがて、乱された懷に忍び込んだ掌が、月読の滑らかな胸に掛かった。

「あ…っん。厭…」

「敏感だな。―愉しめそうだ」

涙に濡れた頬に口付けし、拒絶の言葉ごと唇を奪う帝釈天は舌を絡ませ執拗に貪るが、絡め取る舌は終ぞ誘いに応えることはなかった。

片手で月読の両腕を押さえ込み、空いた手で肌の滑りを確かめながら、最後の紐を解けば誰ひとりとして目にしたことのない、稀な生命の裸体は帝釈天の目を射抜く程、美しき輝きで其処に存在した。

「…時として、全裸よりもそる醜態の様子だな」

淫らにも前をはだけられた姿を言葉にされれば、きつく小宇宙を閉じて顔を背けることしか術もなく、月読はともすれば遠のく意識に叱咤し、唇を噛み締めた。が、

「は…あ」不意に触れられた感触で、其の唇を噛み切る前に吐息は漏れ、一本の指が口腔に含まされた。

「よく舐められよ―と云っても無理かな？」

無理矢理に沈めた指を月読は噛むことも出来ずに、唾液が溢れて唇の端から伝い始める。息苦しさに弱々しくも、震える舌で異物を口の中から押し出そうと試みるが其れは、返って差し込まれた指を舐め上げる結果となっただけだった。

そうしている間にも、帝釈天は器用に己の身体を使って、月読の閉じ合わされた膝を割り込み大きく足を開かせてしまうと、自らを跨がす形で中央に留まった。

すれば自然、触れ合うものが月読を羞恥に染め上げる。

「ふふ、御解かりか？月天子殿を欲していることを。我は正直で

ねー」

最早、両腕の縛めは必要なかった。哀れな程に震え上がった身体は月読の意志に反して動くことも出来ず、漸く引き抜かれた指は唾液を滴らせて目的を果たさんと素早く宛がわれる。

「い…や…。已めーっ」

半ば虚ろとしていた小宇宙が一瞬、大きく見開かれた。言うまでもなく、帝釈天の指が、月読の強張った身体に深く沈み込まれたからだ。

「嗚呼ー厭…。天照様ー」

刹那、韻にされた《旧神》の御名。

其れは隠しようのない、真実月読が求める唯ひとりの存在だった。僅かな躊躇いが帝釈天の動きを止めたが、すっと瞳を細めて何を思ったか徐に、月読の耳元に囁きかけた。

「ー我の腕に居ながら、他の神を思うか？…いいだろう、月天子殿。光の神に抱かれるが御望みなら、この帝釈天を彼の神と想われよ」

しかし、何処に残っていたのかと驚く程の強い力で、月読は再び帝釈天の胸を押し退け様と腕を伸ばし、これ以上ない怒りに声を荒げたのだ。

「いい加減になさいませ！無礼にも程があります。彼の御方がこの様な振る舞いをなさる筈はありませんね…」

己を縛る腕を振り解き、はだけられた着物を掻き合わせて引き摺る様に身体を滑らせ、驚く帝釈天を余所に寝台の片隅へと身を縮める。

「…あ…天照様が、この様な…。こ…んな…ことをー」

「月天子殿」まるで幼子の様に取り乱す月読を、如何したものかと困惑して苦笑するが、やがて只、只管に、泣きじゃくる子を慰める為だけの抱擁を選んだのだった。

「は…放しなさい。ー赦しませぬ、我は…」

「ー月宮」

もう一度、月読にだけ、直接心に語り掛ける様に、呟かれた言葉。

「月宮。落ち着きなさい。―我だ」

耳を疑うにも疑い様のない韻を、月読は聞いたのだ。

「我だ、月宮」

「…天照…様？ま…さか―？」

理想郷に二柱の生命と称される、もうひとつの存在。

共に光の象徴として奉られ、遙か古より時間を渡る、偉大なる時の持ち主。

光の神、理想郷東光殿・天照。

「天照様？…そんな…。何…故…？」

信じられないのは仕方ないだろう。何時からなのか、共に居た多

聞天ですら、見抜いてはいない謀だったのだから。

「何…故？この様な…。酷い…酷い…い…」

だが、この黄金の瞳に、この韻に、偽りなど在于る筈はなかった。

「如何して―」

それでも、如何に己が再び合間見える時を待ち望んでいたのかと

月読自身が再度痛感すればする程に、何故もつと早くに知らせては

くれなかったのかと、抱いた情の深さに天照を恨めしくも思っただ。

「―赦せ、月宮。全ては其方を護る為だった」

力なく崩れる月読を優しく抱き、其の味わった怖れに心を痛めな

がらも天照は、涙に暮れる月の神を又誰よりも、愛しく想っていた

のは確かだった。

未だ震えの治まらない儂い身体を抱き締め、そつと頬を寄せれば

自らの温もりを分け与える様に、包み込む御光の中で事の次第を告

げる。

それは、創造神となろうと企てる無能勝明王・阿氏多から端を発

する、全くの逆手に取った光の神の謀だったのだ。

きつく配下の者を払い、一寸の隙も与えない結界を張り巡らし、

それでも念には念を入れる心算か天照が用いた言葉は、《旧神》と

しての時を宿す言霊であつた。

『何を血迷うたか、無能勝明王は自らを創造神と成す企てを起こした。全く、玉座を狙うは可愛いが、畏れ多くも天輪聖王とは…ね』突然の衝撃が大きすぎたのか、月読は只、言葉を失くして腕の中に身を寄せたままだつた。無論、天照とて騙す心算など毛頭なかつたのだが、其の様子を瞳を曇らせ今、何を語ろうと、それは言い訳に過ぎないのかもしれないと自嘲する。

冷たい額に、涙に濡れた頬に、やがて唇を進め、接吻を齎す。命を注ぎ込まれるかの様に、光に満ちた情を月読が解らぬ筈はなかつた。

「…あつ…ふ。天照…様」

「月宮、我に其の身を委ねよ。何も懼れることは無い。事は、全て密裏に運ぶ」

ふたつの尊き影が眩い光に呑み込まれたのはその時だつた。

光の神は、自らが創り出した亜空間をこう乎んだ。

『化楽天だ。我等の他、此処には何一つとして無い』

理想郷に君臨する《旧神》《新神》の中でも、この《化楽天》を創り出せる神はそうそういない。この時空は天の楽師が《光音天》を生み出すとは訳が違つ、時の成せる技とも謂えようか。

『その様な…天に。わ、我を…』

流石に其の意味を察したか、月読は僅かに着物を合わせて身を縮めた。

理想郷に於いて《化楽天》とは、即ち秘せる逢瀬を叶える唯一の天で在つた。

此処では一切を赦される、又、一切の偽りを赦されぬ、生命の情を交わす処。

既に偽りの衣を脱ぎ捨てた光の神は、月読の小宇宙に確かな存在を現していた。

輝ける黄金の瞳、光を纏つた波打つ髪、時の帝も斯くやの美しき御姿は正に、光其のもので月の神を照らし出す存在で在ると共に、

唯一の生命でも在った。

この身の震えは最早、恐れではなく慶びで在ると月読は解っていた。だからこそ其の眼差しから逃れたくも想ったのだ。

帝にも、誰にも覺られる訳にはいかないと、頑なに隠し続けてきたこの情を、心の影を暴く光。

『―天照様』

だが、この命を望んだは光の神自らでもあったのだとすれば、月読に拒むことなど出来る筈はない。

『ほ…んとう…に？我を…？』

『今更だな、月宮。この我を疑うか？』

欺いておきながら云えることではないが―と付け加え微笑むが、月読には其れが全て、自らを想うが故だと漸く頷くことが出来た。

謀反の企てを星に映さず、この大宇宙に幻想を描いた創造神・天輪聖王に取って代わろうとするは無能勝明王・阿氏多。それだけで事の重大さを解り得る月読は、幻想が理想に遷された謂れを識る生命なのだ。

己の何と不甲斐ないことかと、藍色の小宇宙は涙に溶ける程潤んでいた。

『申し訳…御座いませぬ…。我が…何も出来ぬばかりに―』

楽園都市祈響元帥などと呼ばれては居ても、時の帝を護ることも御世を導くことも本当は、何一つ叶わないのだと俯き、零れ落ちる涙に嘆きの深さを見せる。

先の聖戦を以って理想郷は時の帝の下に平定され、よもや再びの災いなぞ、それこそ理想郷の終焉くらいだろうと踏んでいたのは確かだった。だが其れは月読だけではなく、天照他稀なる『旧神』は皆、そう想っていたのだ。

『無能勝明王は、云ってみれば『新神』だからな。浅はかにも天輪聖王とは何たるかを取り違えても致し方あるまいが―。事は其方に及ぶ故、少々強引な策に出た』

『それは…』 自らの力不足だと肩を震わす月読に、しかし最後まで

で云いわせない。

細い顎を取り、天照あまてらすは深く唇を合わせて舌を絡ませる。すれば、先とは違い月読つくよみは、拙つたなくも応えてくる。

小宇宙ひとみを閉じても感じる光は天照あまてらすの時の現れだった。

『ふ…ん』僅わずかに零れる吐息が甘い囁ささやきとなり、ふたつの命はひとつの輝きに溶け込む。重ねた唇から伝う温もりは、其それだけで共に情たがひを昂しこらせるのだった。

眩まばゆい光の褥しとねに横たえられた、月の幻影。

淡く煌きらめく白晳しやうせきの身体は、其その全てを光に晒さらされ暴あばかれてゆく。

『あ—あ。天照様あまてらす…』

『月宮つきのみや、其方そなたはこの我のもの。誰にも渡す心算つもりはない—』

指先で確かめながら、唇で証を刻む。吸い付く様に滑なめらかな肌に朱色の華は鮮やかに咲き乱れ、所有の印は散らされる前に再び押されて、月読つくよみは身悶あまてらすえた。

『天照様あまてらす』

幾度も繰り返される口付けに感覚は麻痺まいひするどころか研ぎ澄まされて、僅わずかに触れる感触にさえ敏感に反応する身体に戸惑うとろう月読つくよみを、黄金の瞳は見逃さなかった。

『—感じればよい。もつと、乱れて魅みせよ』

『そん…な…。あつ…。厭いや—あ』

徐に握り締められたことを、流石さすがに躊躇ためらう様に膝を寄せて訴える。しかし、掌で包まれ反応を確かめるかの様に摩たられれば忽たちまちに、腰の力は抜けてしまう。

強弱を付けて、時折指先で弾かれて、都度つど零れる溜息に流れる涙は歡喜の雫と共に褥しとねに溢れ出していた。

『や、め…。もう…。厭いや』

『偽りを云いうな、よいであろう？』

『嗚呼ああ…駄目あや、お已めくださ—はっ…んっ』

俄かに信じられない行為に驚愕を來たす月読つくよみを余所よそに、天照あまてらすは躊躇ためらいもなく滴る甘い雫を舌で拭ぬぐい、そのまま口に含ませ舐め上げた。

『ああ―』軽く齒を当てれば細い腰は艶かしくも動き出し、言葉とは裏腹に身体は悦びに踊る。

其の様子に、一気に登りつめる情の猛りはそうして月読にだけ赦された。

偉大なる存在の口の中に吐き出された、偽りない清らかな蜜。最後の一滴まで零すことなく飲み乾され、月読が漸く気付いた頃には輝かしい黄金の瞳が満足気に、其の全てを見詰めていたのだった。

『あ…あ…。何という…こと…。お赦し下さい…』

羞恥と後悔に、美しき顔を両手で覆い隠しながら、月読は震えた。まさか彼の生命の口の中で果てようとは、何と畏れ多いことかと必死に許しを請うが、それ以上に嬉しさが勝っていることに、如何していいのか解らなくなる。

『ふふ―。正に甘露そのものだ。我はこれで、其方に不死を約束された訳だ』

月読の真の時を冗談にもそう云い、天照は隠された顔を覗き込む。白晳の美貌は僅かに朱く染まり、藍色の小宇宙に漲る煌きを確認すると、再び接吻を交わした。

『次は、其方を内から輝かせてみようか―』

正面から見詰められ、黄金の瞳に釘付けにされる。其の眼差しは、遙か古より変わることのない、大いなる慈しみの情を宿した不変の無量寿光を讃えている。

直接合間見えることの叶わなかった時間でさえ、失われたことのない、輝き。

幻想が理想と成った御世で、唯一偽りでない、時。

『天照様…』

最早、何も云えなかった。

天照の言葉を享けて、甘い疼きが起こる。只、只管に、求めて已まない情は既に隠し様もなく、己の身体が証明しているのだ。仮令様のない、慈しみによって。

願いを聞き届け、それを叶える祈響元帥だが、自らの祈りを響か

せることは天に赦されていなかった。御世の為に時を遣う、時の帝の形代でしかなかったのだ。

其の月読の渴きを満たせるは唯、同じ存在の天照だけ――。

諦めようと己に幾度と云い聞かせては諦め切れなかったこの情を、《化楽天》という光の神の慈悲なる天によって今、秘めたる契りとして交わされる。

優しさと、有無を云わせぬ強さで内を暴き、俄かに拒む身体に口付けては怖れを取除き、初めての繋がりに震え慄く月読を、更に深く満たしてゆく。

『――は……あつ……』余りの心地好さに狼狽する愛しき生命を目の当たりにし、天照にも余裕はなくなりつつあった。月読を気遣いゆくりと快感を与えてはいたが、一度奥まで貫くときつく抱き締め熱い吐息で囁く。

『逸る情を抑えるは、何とも苦しきことよ。受け止めてくれようか？月宮』

云いながらも腰を引き、また進めては内を満たす抽挿に合わせて上がる卑猥な声に艶やかな様子を見出し、頃合を計って激しく打ち据える。

『ああ――。厭……あ、あ……』

其の余りの快楽に付いて行けず意識を手放しかけた時、己の最奥に放たれた迸りを感じて身を震わせた月読も、同じ様に達していた。求めていた光に漸く抱かれ、この身に注がれた熱き情を全て受け入れ受け止めたことで、またこの果てしない時間を繋いで往けると月読は思った。

『……天照様。お情け、嬉しゅう御座いました。……もう――』

『もう、満足したと？馬鹿を申すな、これからだ……』

繋げられたままの身体が再び熱を持ち、其の奥に脈打つ鼓動を感じた月読は顔を朱く染める。あの悦びをもう一度味わえるのかと想えば、はしたなくも包み込む内壁が一斉に漣を起こし、放すまいと締め付けたのだ。

『ふ……。真、其方そなたも正直だ』

『——んっ』膝に掛けた掌で大きく両足を織り込むようにして、天照あまが接吻くちづけをする為に覆い被されれば、月読つくよみの中で張り詰めたものが更に深く奥を抉る。

『私の《化楽天》から逃れたくば、我を満足させよ。其方そなたしか、出来ぬことだ』

己にしか、出来ぬ——そう云われて狂う程の情を知らされた月読つくよみが、天照あまから解放されるには未だ、幾度となく受け入れ貰われる必要があった。甘く、淫靡な時間ときはそうして秘めやかに、交わされる睦言で偽りない情を其処そこに示すのだった。

今は静寂の理想郷に、確かに忍び寄る災いの影——とも言おうか、光の神・天照あまてらすが掴んだ気配は捨て置くことの出来ない、尋常ならざる謀はかばかごとであつた。

玉座に代わって御世を牛耳る思惑なぞ今や珍しくもない程、それ程の永ながきに渡って理想郷は存在し続けて、時の帝・天無帝の下支配もとされていた。詰まりは企て全てが鎮圧され、絶対の主神はそうして強大なる時ちからを以って君臨しているのだ。

其処そこに目覚しい活躍を見せたのは、専ら《新神》等であつたことは既に承知しているだろう。それまでは一介の武神に過ぎなかつた帝釈天あが、都度つどの働きの褒美として諸天中央という位を授かり、数多またの神将を束ね、御世の守護を担になう神と成つた。

残虐非道と恐れられる所以は偏に、己の行く手を阻む者に対して一片の慈悲も見せないことからだろう。剣を向ける者には容赦なく時に強引な策を強しいて退ける。その中には係わつた者の一族諸共もろともに滅ぼした一件も、少なからず含んでいる。

だが、理想郷東光殿・天照あまてらすは迷わず謀はかばかごとの協力者としてこの帝釈天を選んだ。

《旧神》には《新神》が何を成そうとも、一向に構かまいはしないといのが実のところ、本音ほんねだった。

それは《新神》が、決して創造神が描いた幻想に手出し出来ないことを識^しっていたからだ。如何に如何足掻^{あが}こうが、大いなる天輪の理に齒向かう事など出来ないのだ。それ故の《新神》、それ故の、命だったのだ。

全く―と呆れ果てたのは、その《新神》で在る無能勝明王・阿氏多が創造神に成らんと企てたからだだった。

創造神・天輪聖王と成り、暁には己の夢を現世とする。

玉座を飛び越え愚かにも、時間軸を歪める虞のある野望はこの大宇宙を巻き込んだの戦なのだと、果たして承知の上だというのは―と、天照も正面から迎え撃つ心算で在った。

しかしながら、如何に無能勝明王―誰も敵わない神―と呼ばれて居ても、一切を敵に回す度胸はなかった様だ。密かに書を送り、裏工作で自らの足場を固めて先ずは、身の保全を最優先させた。何とも拍子抜けしたは、他ならぬ天照の方だった。

企ての大きさに比べてやはり伴わないのは魂の器だと、そうして光の神は一つの策を思い付いたのだ。慎重に事を運ぶは当然、己が身を庇うは必定であったとしても、無能勝明王には些か失望した《旧神》で在った。

御世に二柱として存在する天照が表立って動けば、事は要らぬ騒動を起こしかねない。又、誰よりも安寧を願う麗しき生命がそれにより、更なる危険に晒されることだけは避けねばと、善見城に己の無量光を当てたのが最初の謀だった。

一瞬の煌き、刹那の閃光を見逃す帝釈天ではなく、それを赦す光の神ではない。

白羽の矢は見事に命中し、次第を打ち明けると上々とはかりに瞳を輝かせたは、諸天中央・帝釈天だった。そして、大胆にもこう云ったのだ。

「無能勝明王を討ち、我が御世に君臨するは、如何かな？」

「適う為れば、好きにするがよい」

そして、理想郷東光殿・天照はこう返した。

先にも述べた通り、《旧神》で在る天照には、幻想自体が係わらないのであれば誰が何をしようと、如何でもよい事であった。

此度の謀に、謀を以って収拾に当たる神の密約は、こうして交わされた。

光の神は帝釈天の姿に、帝釈天は、光の神の姿に変化する。一時ではあるが、目晦ましの術は共に、通常では得られない高揚感を齎した。

「不思議なものだな。何とも漲るこれが、《旧神》の力か？」

其の姿を映しただけの帝釈天が、身体の内側から溢れ出す光に僅かに驚き云った。

「何を如何捉えるか、それは其方次第だ」

天照も又、武神の身体つきに満足気に微笑む。

「このまま東光殿殿の姿で御世を牛耳るも、中々面白いとは思われんか？」

「愚かな事よ。目に映る姿なぞ、何の意味があろう。欺かれるは所詮、程度の知れた存在よ。――が、気を付けることだ、帝釈天。東光殿はその様な振る舞いはせぬ」

腰に手を当ててふんぞり返る様子に、優雅な手付きで戒める。

「ふん。それを云うなら東光殿殿こそ。我は武神故、常に身は危険に在る。この帝釈天の剣技の程に、泥を塗るは勘弁願いたい」

「それは要らぬ危倶だ」

まさか天照からそう云われるとは思っていなかった帝釈天は、目を丸くする。光の神が剣に通じているとは流石に耳にしたことがなく、其の自信は何処から来るものなのかと思わず問い質してしまっ

た。
「――なに、諸天中央殿に斬りかかる程の兵は、そうそう居まいと踏んだまで」

飄々（ひょうひょう）と受け流されて、密かにやられた、と手を上げた。

「まあ、暫くは、我は物見遊山といくか。如何にも敵わん事に出

くわした時には、加勢かせいしてやつてもよいぞ」

皮肉めいた言葉で仕返しとばかりに高を括くくる、己の姿をした者に
しかし、冷やかに一瞥いちべつを食らわした者は、確かに光の神・天照あまてらすだっ
た。

「その余裕が何処どこまで続くかだ。云いつておくが、理想郷東光殿りやうきやうでんの
任は甘くはないぞ」

目の前で瞳を鋭利に細める姿は帝釈天のもの。帝釈天が己に睨にらま
れる、何とも可笑おかしな状況に既に頭を抱え始めていることに気付く
と、些いさか早まったかと唸うなった。

「如何どうも、契約を持ち掛けておいて態度がでかいのとは違うか？
我は別に、此度こたひの件に首を突っ込む謂いわれはない訳だしな。…その
気になれば、諸天中央として無能勝明王を討つ事も出来る。東光殿とうくわうでん
殿の、与あずかり知らぬ事として―」

「玉座は如何どうする」

此処こゝで又、帝釈天は肝を抜かれたのだ。
理想郷東光殿りやうきやうでんとして玉座に仕える天照あまてらすから、よもや玉座を餌に釣
られるとは想像もなかった。しかし、ふてぶてしい笑みで何とか
その驚愕きやうがくを隠す。

「我は、欲しいものは己おのが手で掴み取る。…お忘れか？」
確かにその通りだった。今までもそうして、自らの力のみで此処こゝ
まで伸し上がったのだ。それを今更、《旧神》の力添えを期待する
筈はずがない。

だが、何を思ったのか天照あまてらすは、帝釈天の言葉になるほど、と頷い
た。そして、

「常々おもむく（つねづね）、思っていたのだが―」と続けた。

徐に切り出され、言葉の続きを待つ帝釈天に届いた思いは、他の
何よりもその心を動かし、得心とくしんのいくものだったのは、間違いなか
った様だ。

「其方そなたと我は、似た者同士だ」

「何が如何どう、似ていると云いわれる？」

《旧神》と《新神》。慈悲深い神と残虐な神。美しく優雅な様子と相反する厳つい武神の様子。どれを取っても真逆とさえ思われる存在の一体何処が似ているのかと、僅かに苛立ちながら先を促した。答へは、帝釈天から大いに信頼を得るものだった。眩い光を纏った天照の姿で高らかに笑い飛ばしながら、己の姿をした光の神を見据える。そして、最早何も云うことはない、恭しく礼を取った。天照は、帝釈天の声でこう云ったのだ。
「我も――な。欲しいものは、己が手で掴み取る。仮令、何で在るうとも」

月輪の間を後にした帝釈天は、善見城の回廊から宮中の在る方角を見ていた。莊嚴な玉座を奉る佇まいを見渡すことは出来なかったが、其の瞳にははつきりと視えている。見る者に依って姿を変える、正に時の帝の眸と同じ、建造物だ。

その懐の奥深くに蔓延る数多の思惑を絡め取りながら、やがて一つの企ては強大な歪を生み出すのだらう。

だが、現時点で覚醒させることは出来ない存在を何よりも懼れる生命は、自らが事的首謀者となるべくして此処に起った。

諸天中央・帝釈天の姿で欺き、共に此度の謀の鍵となる祈響元帥・月読を、自らの創り出した《化楽天》に於いて慈しんだ、光の神の次なる策は、果たして――。

伍

伍

如何にも可笑しい――。

巨大な柱の影に潜んだ少年は、余りの警戒の無さにこそ、常ならぬ動揺を覚えていた。伝え聞いた結界の護りは確かに怖ろしいもので在ったが、一度越えてしまえば後は、容易に城の内部であろう此処まで入り込めたのだ。

城が抱える美姫だけでも三百は下らない筈なのに、警備の神将は愚か、主に仕える従者等の姿さえ見当たらない。だが、息を潜め、何かに怯えている気配でもない。

只の静寂だけが、玉座の在る宮中を護る要塞・善見城に横たわっていた。

「……話しに聞くとでは大違いだな。でも、手入れは行き届いているし、花も、枯れてない。ひょっとして何処かで宴でもしてるのかな……」

幼馴染の少女が見たら飛び付きそうな、見事な色合いを見せる花の束は生気に満ち溢れ、輝きながら咲き誇っている。生けられた花瓶は己の背丈程のものばかりで、刻まれた紋様を辿る色彩も又、艶やかで趣も含む。

「やっぱり、諸天中央様のご趣味かな」などと呟きながら、少年は思わずその様子に見惚れて暫く呆然としていた。

己が住まう、暗く冷たい北の池とは比べものにならない、絢爛豪華な善見城。

強固なる要塞と云われるのは詰まり、外見からではないのだ。

少年が忍び込んだ場所はその城の西側に位置する筈だったが、実は余りの広さに気が付けば、此処が何処なのか分からなくなっていた。

「お馬鹿さんね、迷子なの？」

と嘲る少女の声を聞いた気がして少年は、何やら文句の一つも言いたくなくなった。

「善見城の見取り図なんて、容易に手に入るもんか。そうでなくとも何一つ、仕度さえないまま行つて来いって言つた、お前にだつて責任はある筈だろ？」

しかし、幾ら言い訳したところで埒もなく、少年は一つ息を吐くと辺りを警戒しつつ、磨かれた回廊を先へと辿ることにした。

延々（えんえん）と続く、要塞の迷宮。

この善見城の護りが何を以つて成されているのかを、未だ少年の龍王は気付けなかったのだ。水神の眷属ならば水の扱いには長けている筈が、それ故に幻力に惑わされるとは、後にして流石に深く落ち込んだことを今、知る由もなく――。

「……本当に、結界を抜けたんだよな。此処つて、城の中……だよな」

行けども行けども同じ景色に戸惑いを隠せなくなる。回廊から空を見上げて、只の雲ひとつない晴天が目飛び込んでくるだけで己が何処に居るのかを示すものは皆無だった。

「日輪の位置だけでも確かめられたらなあ。困つた……。如何しようか」

許しもなく忍び込んだ以上、姿を見咎められるは余り好ましいことではないだろうし、それ以前に一向に、誰にも会えないのだから尋ねることさえ出来ない。

「祈響元帥様は何処におわしまするか？……なんて、ね」

こんな時に幼馴染の少女の快活さが微笑ましく思えるのは、やはり少々不安になっていたからだろう。八大龍王のひとりとして北の池で務めを果たしてはいても、祈響元帥・月読の従者で在る瑠璃と同じ、人の子で言えば十四、五才なのだ。

このまま迷い続けていたら、本当に何もかも手遅れになりそうだと些か焦りを募らせる。出来ることなら避けたかったが、少年は徐々に、一つの花瓶を覗き込んだ。そして、その水が澄んでいると確認

すると、ひたと右手首まで沈めこう言った。

「あのく龍王が問う。尊き月の御方の居場所は何処か、我の支配に従い示せ」

最初からこうすれば何も路に迷うことなどなかったのだが、如何せん、諸天中央が敵なのかそうでないのか解らないまま力を遣うことは、無謀と言えは無謀なのだ。

況して、此処は彼の神の陣中。

敵の只中で己が力を誤ることなく遣える程、あのくという少年は時間を重ねていない。一つ間違えば魂ごと、敵の手に落ちてしまう危険があると識らされていたのだ。

俄かにさざめく水面がひとつの淡い輝きを映し出す。

其れは、宛ら満ち行く月か、又は欠け行く月か。

何とも言われぬ煌きを放ち、鋭利で硬質な美しさは何処にも見られなかった。飽く迄艶やかで、今にも滴り落ちんばかりに銀色の雫を湛えている。

ふと、あのくの頬が赤らんだ。少年が知る祈響元帥とは大凡かけ離れた、卑猥さが隠し様もなく其処に映し出されていたのだ。

「まさか、訪ねたは事の最中……とかつてことは、ないよな……」

「馬鹿なこと言うんじゃないわよ！」という、少女の叫び声が今にも聞こえそうで、あのくは密かに肩を竦めたのだった。

惑わされることなく水が示した場所が確かならば、更に階を上がった東側に月読は居る様だと判じる。

あのくは必死に善見城の正面がどちらを向いているのか、そして己が立つ此処からの位置を慎重に思い描いて現在の居場所の特定を急いだ。何せ幼馴染の少女の願いは主の操を護ることであり、そして大人の情事を暴く危惧を想えば嫌でも少年は集中せざるを得ないが、如何にも要らぬ妄想が邪魔をして、あのくは上手く考えを纏められずに居たのだ。あの妖艶な煌きが本当に月の神を映したものであれば、何処までも美しく清浄な祈響元帥の、今までの姿がまるで偽りで、本当は誰よりも艶かしく淫靡なのではと想えてくる。

「…ヤバイ。乱れる祈響元帥様がチラついて、妙な好奇心が抑えられん。この際濡れ場を拝見して、我も大人になろうかな…」

知識ばかりがひとり歩きをする年頃」と言えるのかは置いておいて、色事に興味があるはあのが男神だからというばかりではないだろう。

清らかな存在の象徴でも在る月の神を、闇で眺めることは即ち聖性を犯すことであり、並み居る美姫だとて恐らくは足元にも及ばないあの美しさに欲情を抱かない者が居たとすれば、余程の鈍感か聖者が若しくは、只の阿呆かといったところだろう。

「今迄無事だったってことの方が、不思議かもなあ。ま、手を出すとなれば命懸けることになる訳だし、そんな愚かな真似する様な神が居なかったってことかな？」

時の帝の覚え目出度き月天子を犯すなどと企むだけで首が飛ぶだろう。それを敢えて望む程の野心家が、詰まりは諸天中央だった、ということなのかも、と乾いた笑いを零したときだった。

唄が、聞こえたのだ。

狂おしい程の甘い、唄が。

咄嗟に身を翻し、声が漏れる部屋の扉からは死角になる柱へと潜む。若しや何かしらの情報が得られるならば好都合だと、あのかは息を殺し、耳を澄ませた。

「…は…ん。嗚呼、堪らない。ね…え、主様、もつと…も…、ん」
「はしたない姫だな。その様に締め付けて。もう幾度と達したであらうに…」

「あ…ら、嫌だわ。主様だって…。こんなに、張り詰めていらつしやる癖に…」

やられた—と思わず顔を覆ったあのかの耳に、届いたのは睦言であつた。

「あつ…。いいわ、其処—」

「ふふ、歌姫の身体は素直だな。…此処は、如何か？」

女性を抱いているのであろう声の主が何を仕出かしたのか、流石

にあのくにも解る程、甲高い叫び声が上がる。それは今迄に聞いたことのない、歓喜なものだった。

耳を塞いだところで既に遅いと、とにかくその場を離れることに決めた矢先、願ってもいない会話にあのくは足を止める。余り気は進まなかったが、もう暫く此処に居座ることになりそうで、出来るだけ冷静に遣り過ごそうと一つ覚悟を決めた。

「ふふ…。今頃は、月読様も…」

「あの気高い祈響元帥殿の、乱れる様子とは如何なるものかな」

「—このわたくしと、どちらが欲情されます？愛しい主様…」

己の泉に深く沈めたまま、うつとりする程甘い声で囁く女性は豊かな胸に両手を当てて、主に自慢げに見せ付けた。

褥に白く浮かび上がる柔らかな肉体を自らに跨らせる主とは、楽器を奏でる才に秀でた天の楽師・乾闥婆だった。

そして、その乾闥婆に奏でられるは美声を誇る、歌姫・緊那羅である。

「常に、水水しい果実の様に、歌姫の乳房は色を付けておるな。その紅色の実の味は如何なものか？」

「宜しければ、吸うてみませぬか？」

丁度、主の口元に乳房の先端が届く様にと僅かに身を乗り出せば、煌く那羅姫の蜜を絡ませ滑りがよいことも合い合わさって、泉に含んだものがずりりと抜け落ちかける。その感触をも味わう為か、態と二、三繰り返した。

唇を掠める突き出した乳首と猛りを擦る摩擦が楽師を徐々に追い上げていく。

「ねえ、主様？月読様とわたくしと、どちらが美しいでしょう…」

「残念ながら、祈響元帥殿のこのような様子は知らぬのでな。—が、男を煽る手管は歌姫の方が上であろうな。…さあ、私を諸天中央殿と想い、もつと乱れてみせよ」

「あつ…あんつ…。酷い、主様！」

体勢を逆転させて、乾闥婆は緊那羅を組み敷いた。深く身を抉る

繋がり、微かに痛みを覚えた歌姫が上目遣いで睨み付けるが、それも直様揺さ振られることで焦点が合わなくなる。そして一気に上り詰め、悦びの唄を惜し気もなく響かせた。

あのくが扉の向こうで耳立てているとも知らぬままに、再び荒い息の下如何にも気になるのか、歌姫は月読のことを口に出す。

「ふふ。諸天中央様にその身を開かれて、聖性を奪われて、祈響元帥様は何をお祈りになられるのかしら？やはり、御世の安寧？玉座が変わっても月読様の身は安泰。お羨ましいこと」

「我が歌姫では不服か？」

「わたくしの望みを、月読様は叶えて下さいますかしら」

「天后にでもなる心算か？」

火照った身体を起こし、緊那羅は裸体を隠すこともなく帳を開いた。

其処に現れたひとつの世界は、幻想の様に輝く理想郷楽園都市だった。

「この都に息衝く者全て、わたくしの足元に跪く。そして楽園都市から理想郷全土に天后として、わたくしの存在を知らしめるのですわ」

「その美しさを…か？」と傍らで囁く乾闥婆に、嬉しそうに寄り添った。

腕を伸ばし、接吻を強請る。

濡れた舌を絡め合い、角度を変えて繰り返し口付けを交わし、唾液を滴らせて唇から糸を引かせれば、輝く都に反射して卑猥な虹を生み出した。

やがて首筋に愛撫は移り、乾闥婆は乳房を揉み下しながら豊かさを味わい、弦を弾く様に爪で弄んだ。

既につんと突き出した両の乳首を更に舌で舐め、時折きつく吸い上げる。歌姫の身体を知り尽くした主にしてみれば、その美声を引き出すのは容易なことだった。

「足を開け。そなたの泉に咲く花の蜜が溢れておろう。指だけでは

拭いきれぬ」

言われるまでもなく、歌姫は進んで両足を大きく広げていく。この姫に恥じらいというものが存在しないことを最早、乾闥婆は気にすることはなくなっていた。

ひっそりと息衝く神秘の泉を見出し、未通の花に指を入れたは何時のことであつたかと、天の楽師は思い起こす。だが、実はこの緊那羅を作り上げたのも、乾闥婆自身であつたのだ。共に宮中に出仕する、遙か以前のことであるが――。

「あ…ん。主…様…。嫌っ…。焦らさないで…ん」

舌先で花弁の一枚一枚を愛撫し、徐々に深みに差し込むことが堪らないのか、歌姫は広げた足で空を蹴る様にして必死に訴える。

「もう少し、我慢いたせ。ゆるりと味わうも一興だ」

しかし乾闥婆はそれを退けたつぷりと唾液を花の中心に含ませる。緊那羅の蜜を吸い、代わりに渴きを潤すそれは歌姫にとって、半ば拷問であつた。

「はっあ…。んん…。も…う、入れて、奥まで…。主様、主さ…まあ」

空いた両手は自らで乳房を愛撫し、少しでも疼きを紛らわせようと試みるが、幾度として味わっている我が身を満たすあの快感を齎すことは未だ、許されない。

媚びる声色で、腰を振る仕草で、滴らせる蜜で乾闥婆の猛りを誘い、泉に受け入れようと両足を天高く掲げ、膝を折、唾液と舌で犯された花を細部まで露にする。

「…祈響元帥殿は、如何様な声で啼かれるのか。諸天中央殿は如何様にして、奏でられるのか…。そなたの様に慣れぬ身体を開かせ貫くは、又一興、この上なく…」

そう呟く楽師の声は、しかし歌姫には聞こえなかった。既に持て余した疼きに感覚は苛まれ、意識も朦朧として身を引き裂く快感だけが、正気にさせるのだらう。

度を越して時を掛け、知り尽くした緊那羅の肉体を味わっていた

が、漸く乾闥婆が長い指を花の奥深くまで沈めると、待ち焦がれた己を貫く快感に溜息を零す。だがたった一本では十分に潤んだ泉を満たすことなど出来る筈もなく、歌姫は自らで腰を振り、何とか狂おしい欲情を遣り過ごそうと涙を流していた。

「全く足りぬ様だな。この泉を満たすには、些か私では不十分の様だ……」

「……なにを、申されます……。あ……は、あつ……。もっと、主様。もっと……、ねえ、お願い……。ああ、このままではわたくし、狂うてしまいます。もっと深く、突いて下さいまし……。お望みのまま、きつと、主様の全てを……受け止めますから……」

出来得る限りの手管を使い、三本に増やされた主の指を締め付け蜜を滴らせ、内壁を擦る快感を引き出しながらも男を煽る歌姫に、それでは存分に己がものを猛らせるがよいと楽師は体位を変えて促した。

天界一の美声が悦びの溜息を漏らし、躊躇うことなく舌を這わせる。

己を満たす為に奉仕する歌姫は禁断の花園を主の眼前に曝け出し、余すことなく目視されることで更に欲情を募らせ蜜は溢れ出る。其処に再び指を含ませ同じ様に舌で愛撫を始めた楽師は正に弦を爪弾くかの趣で、巧みに卑猥な音を響かせたのだ。

尽きることのない甘い喘ぎと淫乱なまでの愛技に勘弁してくれと一目散にその場を離れたかったあのくはしかし、身動き出来ないで頭を抱えて途方に暮れていた。

「……瑠璃い……」

と情けない声で少女の名を呼ぶが、無論助けに来る筈もない。何とか動かない身体を引き摺りながら、あのくは出来るだけ扉から身を放した。

「こ……腰が……」呻く様に呟く少年は、詰まり大人の官能の世界に腰を抜かしてしまった様だった。直接目にした訳でもないのだが、恐らくはあらゆる想像と妄想とで、清らかな純情が淫靡な色に染めら

れてしまったのだろう。

「こんなことなら、自力で祈響元帥様をお探しするんだった…」

今更なのだがあのくは瑠璃の主の御名が上った為に居座ったことを悔やんだ。確かにふたりの会話から情報は得られたが、何処にも確証はない。

「いたいけな少年が居るとも知らないで、よくもまあ…何と云うか、閨房に耽る…が最適か？いや、そうじゃなくて、兎に角だ。善見城であのような行為が許されるとは思っても…。だが此処には三百は下らない美姫が居るって噂だし、まさか、諸天中央様はおひとりでお相手を…？は…はは…。―我は、馬鹿か…」

一瞬でも羨ましいとは決して思っていないと、必死に首を振る少年は幼馴染の少女の顔を思い浮かべ、そして、自沈した。

「瑠璃ちゃん。若しかしなくても、手遅れかも…」

何やら無性に空しくなり、「―もう帰ろうかなあ」と殆ど泣き言を少女に向けて言っていた。だが帰ろうにも未だ腰は立たないまま、柱の影に蹲るその後ろに現れていた存在に、声を掛けられて初めて気付いた程、集中力は散漫していたのだ。

「如何した？何をしている」

その呼び掛けに飛び上がる程驚いたのは、無理もないだろう。

此処に至るまで、只のひとりともすれ違わなかったあのくが確認した姿は、何時の帝直々の配下・天軍四天王最強と謳われる、北方將軍・毘沙門天。またの名を多聞天という、諸天中央・帝釈天の誉れ高き右腕的存在だった。

何故、如何してよりもよって、此処を通りがかったのが彼の武神でなくてはならないのか、これでは最早、何一つとして言い訳は許されないだろうと、少年は諦めた。

「―え」と…その…、路に迷いまして…」

それは確かだった。しかし、言ってしまうえば何とも無様に思われて、あのくは穴があったら入りたい心境になる。

いや、本当はそれどころではないのだが、時として余りに唐突な

出来事に驚き過ぎて、普段ならば冷静に働く思考もまるで使い物にならなくなるといった状態が正に今のあのくで、許しもなく忍び込んだ事が如何程の罪かなど、考えにも及ばない。

只、子供染みだ己の醜態が情けなく、そして立ち上がることも出来ずに蹲るばかりが先に頭を過ぎり、この場で斬り棄てられても何も言えない立場で在ることが綺麗に抜け落ちてしまっていたのだ。

しかし何が効を奏したのか、多聞天は僅かに目元を緩めると、「ふむ」と頷きあのくの身体を抱き上げた。そして瞳を合わせると、優しくこう云ったのだ。

「この善見城は造りそのものが要塞だから、致し方あるまい。特に今は、然る御方を御招きしておる故、常ならぬ厳戒令を強いておつてな」

続けるに、だから城に住まう者等にも無闇に出歩かぬ様申し伝えてある、ということ、此処まであのくが誰にも出会わなかったのは詰まり、その為だった。

「…ご命に背く心算はなかったのですが…。その、姫が、如何しても…」

多聞天の様子に少しばかり平常心を取り戻したあのくは空かさずそう言った。己は善見城に住まう姫君の従者で、願いを叶える為に仕方なく部屋を出たのだと。

その仕える姫が誰かと問われたとしても、噂が本当ならば此処には三百程の美姫が居る筈で、その全てを多聞天が記憶しているとは思えないと機転を利かせたのだ。

宮中に出仕する途中ではあったが、特別呼び出された訳ではなかった為に、あのくは正装をしていなかった。それもあって己が従者だと言っても疑われないだろうと踏んだのだ。八大龍王とはいっても四天王と顔を合わせる機会は殆ど無く、彼等程有名でもない立場も踏まえて多聞天が己を見知る訳はない、と。

「なるほど。姫君の強つての願いならば、聞き届けるが役目だな。それで？何処へ向う心算であつた？」

そう来れば幸いと、あのくは遠慮がちに「東へ」と言った。

さて如何^{いかに}出るかと思いきや、多聞天は些^{いさな}かの疑いもなく方位を示す。

「水の幻力に惑わされるなよ。如何^{いか}な用向きかは聞かぬが、東ならば尚^{なほ}更^{なほ}護^ごりが堅い場所だ。その訳は、云^いわずとも知れておるだろう？」

そう云う心理は最もだった。

善見城の東側には主たる諸天中央・帝釈天の住まう《喜見の間》が在り、そして又、多聞天曰く「然^さる御方」も、その方角に居るのだ。

同じ城の中とはいえ、最^{さい}たる護^ごりが成されているのは無論、熟知している。多聞天も恐らくそれ故^{ゆえ}に、容易くあのくに方位を教えたのだろう。

「承知しております。…有^{ありがと}難^{がた}うございます。これで姫の笑顏^{ほづめ}が褒美^{ほうび}として頂けます」

既に身体も動く様になり、あのくは多聞天の腕からするりと抜け出し礼を言った。

「粗^そ相^{そう}のない様にな」

と全てにおいて念を押すのだろう、そう云い残して訪れた時と同じ様に、足音一つなく武神は何処^{どこ}かへ消えて行った。

「…ふう。たまげたあ。まさか多聞天様に鉢^{はち}合^あわせるとはなあ…」

違う意味で、震えて腰を抜かしそうになりながら呟く。上手いくとは思わなかった出^で任^ませが、何の御加護か斬り棄てられることなく、上手くいったのだ。

「礼の一つでは絶対足りないな。覚えておけよ、瑠璃^{るり}」
と憎まれ口を叩けるもの、あのくが未だ生きているからだった。

よくよく考えても余りな無謀さに、それでも瑠璃^{るり}の沈んだ顔はいたたまれないと、言ってみれば禁を犯す様な行為をしている己が愚かしくも誇らしく、水面下で謀^{はか}られているのであろう企てを、今と

なつては暴くが二の次になろうとしていた。

「どちらにしても、祈響元帥様のお言葉を賜らないと」

御世の安寧を《星読》で識り、永久に楽園を築く尊き生命が災いを赦す筈はなく、だとすれば直に会って確かめるが一番確実だろうと、あのくは思ったのだ。

それにしても善見城の中にまで水の幻力が働いていたとは、と流すが石に驚く。

自らが水神の眷属で在るが故に、その護りによって惑わされ、そして自らを護っていたと気付くと、全てにおいて偶然だとは考えられなくなる。だがそうになると、これを必然と予知した者は一体誰なのか、ということになるのだが、残念ながらあのくには判じることが出来なかった。

まさか幼馴染の少女が知っていたとは思えないし、月読自身が城の護りを請け負うことなどあり得ない筈だ。

「思いたくないけど、まさか諸天中央様が試された？」

などと呟きながら、得体の知れない恐ろしさに身震いするのだった。一切が光の神に由る謀で在ると、知る由もない故に――。

又この時、一頻り情事を愉しんだ天の楽師は曲を奏でていた。女性と交わい穢れた聖性を取り戻すかの様に、清らかな音色を弾き出している。

帳で遮られた褥には、未だ上気した裸体を曝け出し、己が歌姫は横たわっていたが、一度楽器を手によれば見向きもしない。

今は只、只管に、凜と冴え渡った月の化身を思い浮かべていたのだ。

諸天中央・帝釈天の許しを得て、赴いた《月輪の間》で久方ぶりに合間見えた彼の神は、其の美しさを衰えるどころか更に磨かれた様にも見られた。

己だけが創り出すことの出来る《光音天》で一層煌く月の御魂をしかし、曇らせたは他でもない、己自身であったことを悔やんでも、

詮無き事だろうか。

尊き生命は、易とも容易く我が身が帝釈天の配下に下ったことを見抜き、嘆いた。

ふと、指先が弦から離れ、音色は途切れる。

「…今更、聖性を取り戻す必要はないのかも知れぬな。所詮、光の眷属は眷属」

自嘲染みた含み笑いの後に続いた言葉を若しも、月読が聞いていたとすれば、やはり麗しき顔を嘆きの色に染めたであろうか。

天の楽師・乾闥婆が口にしたのは、「光にはなれぬ」という、哀しい事実だった。

それが《旧神》と《新神》の存在の違いでもあり、天に唯一の神・天無帝に赦された、御世に神族として君臨する、謂われでもあるのだ。

天上の月に恋焦がれ、偽りの幻と知りつつも手中に収めれば忽ちに、我が身を嘲笑うかの様な真実が突き付けられる。

ならばいつそ天に反旗を翻し、御世を覆すも一興とこうして諸天中央の配下に下れば、一層の隔たりに成す術も失くすのだ。

「…砕けてしまえばよい。何もかも、全て」

永遠の理想郷に永遠に叶わぬ真の願いが在る以上、乾闥婆は他に何一つとして途を見出せないでいた。これが罪だと云うのなら、天の一切を否定しようと誓う。

「誰でも構わぬ。御世を破壊し新たに楽園を築くのであれば。暁に私の楽の音が、響くのであれば。其処には必ずや、《光音天》が訪れるであろう故に」

再び弦を爪弾き始めた楽師は夢見る様に口元に笑みを浮かべ、善見城を中から護る水の幻力に波紋を描きながら、見事な音色を響かせた。

城中を駆け巡るその調べは其処に住まう者達全ての耳に届き、心を掴んで放さなかった。当然、《喜見の間》に居る筈の帝釈天にも、聞き及ぶところとなるだろう。

若しくは未だ、祈響元帥ききようげんすいと共に閨の中ねやか。

「願いを聞き届ける祈響元帥殿を我がものとし、帝釈天の高笑いが今にも聞こえそうだ。この後は四天王を従え宮中で一騒動起こすか？」

既に何やら多聞天に指示を与えている様であつたことを思い起こし、乾闥婆がひとりそう呟く。推測するには余りに易い行動に、しかし僅かに疑問もあつたのだ。

「玉座が如何出るか……だが」

そう、時の帝が諸天中央の謀反を見逃すとは、到底考えられなかつた。

如何に祈響元帥の《星読》が事の起こりを示さなくとも、強大な時を有する天無帝が御世の災いを赦す訳はない。

天の楽師として宮中に出仕して、時は如何ばかりか過ぎていた。だが、一度として玉座に拝謁賜つたことは無かつた。それが果たして何を意味するかなど、無論解り様もなかつたが、乾闥婆はやはり得心がいかなかった様だ。

「……何かが、動き出しているのか。私も、数多の神も知らぬ、何か――」

御世が理想郷と成つて、其処に初めて存在する《新神》は最初から、玉座は玉座として当然の如く崇め奉っていた。

宮中の奥深く、最も神聖且つ尊き座位に、鳳凰を頂いた御輿は在る。

其の両脇には天の二柱で在る日と月の神の神輿が並び、共に玉座を讃えていた。

幾重にも連なる聖布で覆われ玉座の尊き御姿なぞ一目でも見ることも叶わぬが、常に其処に、座している筈だつた。

理想郷に息衝く全ての生命を捉える万華鏡の眸を、煌かせて――やがて、曲は終わりを迎える。徐に樂器を膝に置き、樂師は一つ息を吐いた。

己の行き着いた、余りにも愚かな考えに呆れるかの様に、知らず

言葉にする。

「玉座の不在なぞ、あり得る筈もない。だとすれば、御世が存在する訳がないのだ」

その最もな意見に否を唱える者も、いないだろう。理想郷が存在すること即ち、時の帝・天無帝の強大なる時が働いているということなのだ。

どちらにせよ、己は諸天中央の配下となった今では玉座に仇名す存在。この時は、帝釈天が謀反の首謀者だと思い込んでいた故の、覚悟でもあった。

一度の移りがこの先天の楽師・乾闥婆にとって何を齎すか、それすらも見越しての光の神の謀なれば、其の神を跪かせる玉座の偉大さが解るだろうか。

今は未だ、沈思の御輿が宝珠を揺らす、其の刹那ではなかったのだが――。

女がひとり、見るからに怪しげで、妖気漂う洞窟の前に佇んでいた。

何処か粘り気のある、肌に纏わり付く空気とぽっかり開いた、暗黒への入り口。

悪鬼・邪神の類が住むとされる、暗い幻界・鬼窟裡への途だった。そよと靡く風もなく、その身を促す誘いもない。

身の内に秘めた、愛しき主からの書状だけを携えて、真の企てを成就する為だけに、今、一步を踏み出した。

一介の、只、神族で在るというだけの女が踏み込んでよい幻界ではないことを重々承知しながら赴くは、それだけの覚悟が出来ている証拠でもあった。そう、偏に我が主・無能勝明王の野望を成さんが為と、女は微かに頬を染めていたのだ。

あの宵を、忘れることは出来なかった。

偉大なる御世の担い手と称される、己の主に抱かれた慶び。

乳房を吸い、この身に深々と繋がった情事が夢の様でいて、あの

快感と痛みは夢でないことを告げていた。そして何より託された、主からの密書が此処こゝに、在る。

女は俄にわかに下腹の辺りを手で摩り、まるで子を宿しているかの様に微笑んだ。

「無能勝明王様…。必ずや、その御心お伝え致します」

そう呟きながら、主が認めた書したたを大事そうに抱き、注意深く足元を探った。何しろ灯り一つ許されない途なのだ。誤って落とす惧おそれはないと分かつてはいても、激しく身体を揺るだけで内股に伝いそうだと、慎重になる。

無能勝明王が託した密書は何処どこに在るのか、それは女だけが知る情事の証だった。

女の身に深く猛りが打ち込まれた際、力を駆使してその内に、何と認めたのだ。注ぎ込んだ精を全て受け入れさせその内に余すことなく染み込ませたことで、無能勝明王が選んだ者にだけ渡る様にとの所業はしかし、飽く迄己の野望の為だけだった。

六

六

神の御世・理想郷には、幾つかの幻界が存在していた。

政の中心となる楽園都市には時の帝・天無帝が座す玉座が在り、其の宮中には数多の神が他の幻界からも出仕している。

事的首謀者たる女の主もそのひとりで在った。

足を踏み入れた暗がり、何時しか青白い炎が燈っている。それは風もないのに時折ゆらゆらと波打って、女の進む途を示して瞬いているようにも思われた。

不気味な程の静寂と、臓腑を腐らせる瘴気が大気を支配した洞窟は、この先に在るとされる幻界・鬼窟裡へと続いている筈だった。

しかし女には、此処が巨大な獣の腹の中の様にしか思えず、知らず緊張で身体が強張ってしまった。最初は下っていた足元も、今では分らない。

青白い炎だけでは辺りを照らし出す力はなく、どんなに目を凝らしても洞窟全体を見る事が適わないのだ。己の感覚だけが頼りだったがそれも、既に麻痺していた。

同じ《神族》で在っても幻界・鬼窟裡に住まうは玉座に悪鬼・邪神とされた者。御世に災いを齎す存在として、忌むべき神とされた者等だった。

隙あらば御世に再び乱世を招かんと、現在も暗黒の淵から窺い覗いている。憎悪や血肉を好み、負の力を抛り所とする神等は気質も荒く、そして戦を得意とした。

それでも、全て玉座の理想に現れた神で在り、幻想郷よりの所謂《旧神》とは存在が違っていた。御世で君臨しだした《新神》として、幻界・鬼窟裡より天軍に席を置く者も中には在るのだ。その代表格が、恐らくは戦神・阿修羅であろう。

玉座に仇名す存在は、そういう意味ではどの幻界にもいるのだ。
此処にそれを成さんとする女も、樂園都市の宮中で御世の担い手と称される、主を持つものだから。

玉座を除いて理想郷全土を識る者はいないだろう。

一つの幻界から続く世界は果てしなく広がり、現在も徐々に膨張していると聞く。そんな途方もない御世を果たして中心とされる樂園都市から支配出来るものなのか、然しながら時の帝・天無帝の時は強大で、揺ぎ無いものだった。

無論、其処には《旧神》等や高位に上り詰めた《新神》等の働きがあつてこそではあるが、それでも個々に存在を示す神を束ねるは他でもない、玉座なのだ。

そして今、宮中に最も強い権力を持つ者と言えば、諸天中央・帝釈天だろう。彼の神は天軍を治め、御世を守護する四天王を配下に所謂《武帝》として君臨していた。

だが、水面下ではそれをも良しとしない者の企てが目論見られ、安寧に見える御世で在つても決して平穩とはいかない様だった。御世の担い手が故に決意したは、玉座における秘儀に偶然にも遭遇したからでもあつたのだが。

其れは、御世を照らす光の神・天照の《蝕》だった。

壮麗な宮中も、樂園都市全体も闇に包まれる、時間の逢わせ。

束の間で闇は晴れ、再び光は御世に満ち溢れるのだが、職務の遂行の為に其の間を惜しんだ無能勝明王・阿氏多が迷い込んだ幻場は、何の因果か応報か。

普段は嚴重なる警戒も、この時間の逢わせでは一切が解かれてしまふのだ。神が見下す《人族》と存在が等しくなる、正に忌々しき《蝕》。

玉座転覆を謀るにしてもこれでは手も足も出ないというのが真実で、故に好機とこの《蝕》を狙う者は皆無だった。

そして、この時は未だ無能勝明王も、愚かなる企てなぞ何一つと

して持ち合わせていなかった。只、相も変らぬ宮中での駆け引きに嫌気が差し、如何にすれば真の安寧が齎されるものなのかと嘆いていたのだ。

己は何の為に御世に在り、何を成さんとしているのか、何時しか疑問は疑念に変わり、此処に謀反の炎が燈る。

玉座が御身を宿す混沌に、明らかに玉座ではない御姿が在った故に。

輝かしく煌く黄金の髪、白亜の光を放つ双眸。

何故、と驚愕するよりも、聡い無能勝明王は覺つたのだ。

ある筈の無い、玉座の不在を――。

光の神、理想郷東光殿・天照は何やら言霊を吐いた。すると、其の掌に収まる程の小さな宝珠が現れる。己が御魂を籠める様に一心に祈りを捧げる生命に、終ぞ其の秘儀を窺う無能勝明王の存在は知れることなく事は成されたのだ。

《蝕》を狙って営まれた赦されまじき行為は詰まり、理想郷全土に息衝く者に対する偽り、全てが其れを起源とする、大いなる歪であった。

だが、漸く得心が入った。

理想郷を統べる玉座が不在なれば、後を絶たぬ災いも致し方ないのだろう――と。

しかしながら何時から、何故に帝が姿を晦ましているのかまでは、流石に判じることが出来なかった。事が事だけに、安易な想像では至らない。よもや天照の企てに因るものだけとは考えられないと、必死に考えを廻らせた。

《旧神》とされる天照等よりも、更に時間を遡るのである玉座の存在を無き者にするなど果たして可能なのか。其の強大且つ永遠に等しい時を如何すれば越えることが出来るのか、無能勝明王・阿氏多は常ならぬ動悸に苛まれながらも只、只管に、当てる無い答えを探したのだった。

宮中の最奥の、最も神聖なる玉座の間に並ぶ御輿は三つ在る。其

の中央の上段奥が理想郷を統べる帝、天無帝の絢爛たる座位であり、聖布という繭の様な結界で覆われた混沌が、謂わば帝が常に在る《無色界》とされる。

精神的条件だけが赦される筈の其の《無色界》に天照が存在するということは、其処は《無色界》に非ず、ということなのだろうか。そもそも御世が存在するということは、何処かには帝は居るということだ。帝の強大なる時に依つてのみ、理想郷は存在することが適うのだから。

そして、無能勝明王が行き着いた答えは、《旧神》ですら必要としない新世界の創世、理想郷其のものを創り返るという事だったのだ。

幻界・鬼窟裡へと辿り着いたのであろう、女は俄かに鬼の気配を感じた。

その存在の禍々しさに一瞬怯みそうになりながらも、気丈に用向きを告げる。

「…鬼窟裡の主、大自在天様にお目通りを」

「誰の使いか」

「―無能勝明王・阿氏多様から書状を預かっております。…此処に言いながら、女は己の腹を愛しそうに摩った。

「無能勝か。…流石に上玉だな」

値踏みする様な視線で足元から見られ、女は僅かに不快になった。しかし、大事な役目の手前何とか己の感情を抑え、現れた鬼には拘らないことと決め込んだ。

「ふん。可愛げのない…。大自在天に会いたくば、俺を満足させることだ」

「―何を！」抗う隙も与えず青白い肌をした大柄な鬼は、鋭く伸びた爪で女の胸元を引き裂いた。襟元から、匂う程の柔肌が覗く。

「ぶ、無礼な！鬼如きが無能勝明王様直属の部下である私に触れてよい筈が…」

「はは。高が使い女が何を言うか。それ、足を開け…」

鬼の巨大な掌が女の腕を掴み、荒々しく懷に寄せると剥き出しの己が肌に確かめる様に、柔らくも張り出した女の胸を擦り付けた。
「天界の女は久しぶりだ。愉たのしませてもらおうか」

「い…嫌。離しなさい！」

腕に食い込む鬼の爪が、鮮やかな血を滴らせる。しかし、女はそんなことよりも瘴気を吐き出す鬼の腐臭に息が出来ず、ぬるりとした舌の感触にさえ嫌悪も快感も感じられなかった。清浄な空気を求めて肺が悲鳴を上げる。

このままでは愛しい主の使いも果たせず息絶えてしまうと、渾身の力で逃れ様と足掻くが無駄に終わる。

着物を剥ぎ取られ、両足を大きく開かされても女は何も、出来なかった。

涙が頬を伝い、意識が途切れる正に刹那、女は鬼の猛りを深々と身体に押し込まれた衝撃で、皮肉にも正氣に戻ったのだ。

「ああー、嫌。無能勝明王様…」

一気に奥まで貫かれ、女は狼狽する。鬼に犯される恐怖は体の内側から生きたまま喰われる懸念で倍増し、内を蹂躪する異物に快感は得られなかった。

「何だ、もつと感じてみる。まさか俺様のモノでは満足出来んのか？詰まらん…」

「…っん…。あ、あ…駄目、止めて」

鬼は揺れる女の胸に、噛み付く勢いで牙を立てた。しかし実際は甘噛みしただけでっんと突き出した乳首は噛み切られることはなかった。爪の先で突付き、舌で嘗め回す。すると女の内は反応を始め、鬼も漸く滑りがよくなったと呟いた。

「そら、もつと腰を振れ。処女でもあるまいに」

「やつ…。あ、んっ」思い切り腰を揺さ振れば、女は最早理性も恐怖もなくなった。

得体の知れぬ鬼と身体を繋げて、最後には悦びに打ちひしがれ

るのだ。浅ましくも求め、無能勝明王と契^{ちぎ}った記憶は辛^{から}うじて頭の片隅に浮かぶだけとなる。

程なくして、鬼は迸りを一滴残らず女の体内に注ぎ込む。有無を言わせぬ力に任せた情事でも、快楽に溺れる己に女は涙するのだった。

「…なるほど。確かに書状を預かっている様だな。何とも酔狂な隠し場所だ」

現れた時から殆^{ほとん}ど裸体に近い出で立ちの鬼が何を仕度するか、それでも佐々（さつさ）と纏^かった衣を空に漂わせれば、其^{そこ}処には全く別の存在感を醸^{かも}し出す威風堂々たる鬼の姿が在る。天界の女を抱き満足したのかその肌は、艶やかに青く光っていた。

「大自在天に直^{じか}に渡したくば付いて来い。…何ならもう一度、今度は俺に渡す為に、足を開いてみるか？無能勝も酷^{こく}な奴だ」

「そなたに読み解く事なぞ出来様もないに。思い上がるでないわ！我が主を何と心得る。鬼の分際で身の程を弁えよ！」

引き摺る様にして軋む身体を立たせた女はそう言うだけが精一杯だった。しかし鬼はというと、何ら堪えた様子も見せずに血走った眼球を向けるだけだ。

同じ神族で在っても、玉座に忌み嫌われた鬼窟^{きくつじ}裡の者は思考がやはり、違うのか。

ひとり苛立ち震える女を置き去りに、暗黒の淵へと消えて行く鬼を只見送る訳にもいかず、受けた仕打ちに今は従うだけと感情を抑える。それでも、主を慕う情だけは嘘偽り無き真実だと、密かに心の奥深くで強^{したた}かに微笑むのだった。

そうして如何^{いか}程進んだか、そろそろ疲労困憊で意識も翳^{かす}み始めた頃だった。

悪鬼・邪神の類が住^{すみ}処とする、幻界・鬼窟^{きくつじ}裡の宮殿へと視界が開け、女は目を見張った。濃い瘴気が渦巻く先に、青白い不知火^{しらぬい}で包まれた巨大な建造物が、女の知る天界の宮中と同じ姿で其^{そこ}処に在ったのだ。

「これは、一体…」と知らず困惑に呟く様子を、鬼は面白そうに眺めていた。まるで天界の者の無知を嘲笑うかの様に、己等の存在を知らしめる。

「天が唯一の御世とは、何とも狭きことよ」

鬼はそうとだけ言うつと、慣れた足取りで細く切り立った一本道を跳ぶ様に歩んで行った。谷底は覗くことが出来ぬ程、深く口を開けている。

此処まで来て何を恐れるのかと、女は覚束ない足元を自ら叱咤する。最早後戻りは出来ないことなど承知の上で、主から書状を預かったのだ。

「無能勝明王様、必ずや、務めを果たしてご覧に入れます」

女は、後僅かの己の命をこうして自覚し始めていたのだった。

話に聞く炎獄界の様子を想像していた者にとって、鬼窟裡の宮殿は信じられない程冷たく暗い場所だった。此処に至るまでの洞窟の中と変わらない、灯火は青白い炎だけ。女には、其処に潜む静寂が孤独に満ちていると感じられてならなかった。

程なくして、ふたりめの鬼が姿を現した。頭上に突き出した鋭利な角は、先程の青い肌をした大鬼と違って二本在った。肌の色は同じであったが、その身には鎧を纏い見るからに高位の者といった風情で、何処となく威厳も在った。

「無能勝の使い女が、大自在天に目通りを所望していると聞いたが、確かか？」

咄嗟に跪いた女ははつきりと、「確かに」と答える。漸くだと、目元を緩めた心内は主で満たされていた。

「我が主、無能勝明王から大自在天様への書状を預かっております。何卒、お目通りをお許し頂きたく存じます」

「…密書だと、報告を受けたが」

「―大自在天様の御為にも、我が主の策にご助力願いたく」

「そなたは書状の内容を把握しておるのか？」

「我が身の内に、記されました故」

それが何を意味するのかを恥らう様に、僅かに女は頬を染めた。そしてその密書を読み解くことが出来るのは、無能勝明王が選びし鬼窟裡の主神だけだと続けた。

「相分かった。しかしそれを受け取るかは、大自在天次第だ」

「無論、承知しております。しかし、大自在天様は必ずや我が主の願いを聞き届けて下さると、信じております。その為に、祈響元帥様にも主の許へ下る様、既に手筈を整えておりますから」

女の自信が何処から来るものか、《旧神》の存在を告げられて漸く分かったと、鬼は一瞬その表情を変えた。それ程に樂園都市祈響元帥の存在は大きなものだった。

最早何も言わず、最後の扉はこうして開かれた。

巨大な空間を支配する沈黙と冷気は、此処が幻界・鬼窟裡の最上級だと示しているかの様で、女は生唾をごくりと呑み込んだ。

全ては自らに掛かっているのだと、その一步を踏み出す。

目指すは鬼窟裡の主・大自在天伊舎那の膝許である。

この大広間の最段に座す、支配者の意を御名に持つ鬼の総大将こそが、女の主、無能勝明王・阿氏多が謀の要と選びしもうひとりの神で在った。

初めて主に玉座転覆の企てを打ち明けられた時、女は己が選ばれた者なのだと俄かに興奮した。そして務めを果たせなかった最初の失態に、死を覚悟し宮中へ赴き其処で己が身は主に抱かれたのだ。

尊き御世の担い手と称される無能勝明王に激しく貫かれ、惜し気もなく注がれた精に依って事の謀りを刻まれた。

女が丁度、大広間の中央に差し掛かった時、それまで只の一つとして感じられなかった気配に驚き思わず足を止める。いったい何時何処から集ったのか、それは鬼窟裡に住まう恐らく殆ど全ての鬼達の気配だったのだ。

如何するべきなのか迷う術もなく、其処で跪くしかなかった。ただ大自在天には程遠く、この距離からでは声も上手く届かないかも

しない。

それでも、これ以上前に進み出るとは敵わなかった。まるで鬼の気配そのものが己が主を護る結界の様で、女の身体を縛り付けていたのだ。

「鬼窟^{きくつ}裡の主・大自在天伊舎那^{いしゃな}様にはご機嫌麗しく、又、私の様な者に目通りを許されましたこと、在り難き幸せに存じます」

出来るだけ声を響かせ、頭^{かしら}を床に付けたまま女はまず、礼を取った。

大自在天伊舎那^{いしゃな}は《新神》として君臨してはいるが、女の主より遙かに《旧神》に近い、偉大なる存在でも在る。悪鬼・邪神を畏怖で束ねる玉座の最も忌むべき神だ。

平伏す女が自然震えるも、無理ないことだった。

機嫌を損なえば忽^{たちま}ちに、構える鬼達にその身を切り刻まれるだろう。何しろ血肉を好み、恐怖を喜ぶ類が住処^{すみか}にひとり、赴いたのだから。

噂では、大自在天はあの諸天中央・帝釈天とは比べものにならない程の、凶暴^{かう}且つ残忍ということだ。女の出方次第で無能勝明王の企^いても露と消える。

何時^{いつ}まで経つても応えのないことに、如何^{いかに}してよいのか分からないまましかし、許しもなく顔を上げることも出来ない。額に揃えた両の指をぐつと握り締めた時、漸く一言、返った言葉は女を羞恥で染め上げた。

「台座に上り、足を開け」と、然^さも面倒くさげに吐き棄てられたのだ。

恐る恐る視線をやれば、大広間の端にその台座はあった。が、何とも卑猥な形は女を凍り付かせるに十分で、大自在天の命^{めい}であつても俄かに従うことが出来なかった。

「何をしておる！早く致さぬか！」と、今度は面白げに鬼達が騒ぎ出す。

先程までの沈黙がまるで嘘の様で、何時^{いつ}の間にか宴の最中の余興

の様な、そんな賑にぎわいに途方に暮れる。

確かに怖ろしき鬼窟きくつり裡の主とふたりきりというよりはましかとも思つたが、かといつて満座の席で、恥はづかしくも晒ひし者になるなど耐え難い。如何いかに下位の使い女めでもこの様な扱いは酷こすぎると、主の名において否を唱え様と試みた。

「御世に重大な文でございますれば、何卒なにとぞ、ご容赦下さいませ」

「御世に重大な為ればこそ、こうして我等で思案しようというのではないか。佐々（さつさ）と言われた通り、大人しく足を開け。…出来ぬなら、加勢致そうか？」

言うや否や、鬼達は我先にとばかりに女の腕を取り、台座の上に押し上げた。

「お…放し！誰が…お前達になぞ…。無礼であろう！私は…」と必死に抵抗するが、女ひとりに鬼達は一斉に襲い掛かり、あつという間にうつ伏せに押さえ込まれて尚な且おつ腰かだけを高く掲かげ上げられ、両足は広く開かせられたのだった。

浅ましい格好に眩暈めうたがし、きつく目を閉じるが涙が零れ落ちる。

そして、冷やかに「検あらためよ」と大自在天に云いい捨てられると、それが合図と鬼は女の着物の裾すそをたくし上げ、現れた白い尻を割さつてその奥にある華を指先で弄り始めた。

「ああ…嫌…」その感触に身震いし、女は大きく首を振った。僅かだが、身体が反応し始めていたのだ。既に一度、鬼に犯されていることが、余計に女を煽あおつていた。

足を閉じたくとも強靱な鬼の腕で両足は掴まれ、敏感な箇所を弄られては尚更力が入らなくなる。徐々に深みを暴かれていく様子がありありと大勢に見られるなど、女にとってこれ以上無い、残酷な仕打ちであつた。

意に反して身体は潤い、鬼の節くれだつた太い指を容易に呑み込み出す。その滑りのよさに、一気に奥まで指を押し入れた瞬間、女はびくりと身体を震わせ身悶えた。

「うーん…あ…ああ」たつた一本の指だが華は受け入れたまま締め

付け銜え込んだ。

「随分よさ気だな。もうこんなにしてやがる」

鬼はそう言いながら、他の鬼に湿った音を聞かせる為に、態と数回指を引き抜いてはまた深く差し込んだ。十分に潤みきった女の華は、これでは何の快感も得られないともっと太いものを強請り始める。

内股を滴る蜜は煌いて、淫猥な匂いを放っていた。

久方ぶりに味わう天界の女に夢中になる鬼窟裡の鬼達は、故に主が席を立つても気付く様子はなかった。しかし大自在天はそれを易ともせず、傍らに控えていた唯ひとりの鬼を従え何事もなかったかの様に、奥へと身を翻したのだ。

「ああ…、お待ち下さい！如何か…。大自在天様！」

己に群がる鬼の狭間から辛うじて見えたのは、漆黒の闇を纏った鬼の総大将のひらりと舞った内掛けの、僅か裾の端だけであった。

女はこうして百を数えるであろう鬼の只中に置き去られ、尽きぬ欲情の生餌とされたのだ。余りの激しさに意識を手放しても直様揺さ振り起こされ、息を吐く間もなく相手をさせられる。己の華は最早散らされ自ら指一本とて動かすことも出来ない程、鬼達の成すがままに弄ばれる、形代と成り果てていた。

「―宜しいのですか？」

女の擦れた悲鳴がまだ、微かに奥まで届く。

しかしそれも後僅かであろうと、大自在天に是非を問うたのは真紅の瞳を持った、他の鬼とは比べものにならない程、見目麗しき鬼神・夜叉であった。

「それが、無能勝の望みだ。役に立たぬ百の鬼より唯のひとり、最強の鬼を欲しておる。―天軍を翻弄し御世に騒乱を齎す、忌まわしき羅刹女を…な」

「大自在天様は若しや、既に無能勝明王から…」

「波旬天子…。ふたりきりの時は、伊舎那と乎べと申した筈だ」

大自在天は夜叉の細い身体を引き寄せると、愛しげに額に口付け

た。

《天魔》と異名を持つ夜叉の額には、第三の目が在る。其の目が見開く時、一切の命や善根は断たれると虞おそれられるが、大自在天・伊舎那に依よつて今は封じられていた。

そして、恐らくは無能勝明王・阿氏多の謀はかりごとに、この《天魔》の存在も含められているのだらう。それに気付かぬ程、鬼窟きくつ裡の主は愚かではない。

「手始めは羅刹女ひとりで十分。暫くは、様子見と行こうではないか」

己が懐ふく深くに隠す様に、大自在天はそう云いつて怖ろしくも儚い命を慈愛で以もつて抱き締めた。其の情こそが、《天魔》の封じの要なのだった。

此処こゝに創り出される天は在る。

俄かに信じ難きは、其れが然る生命かみが描きし天と、同様で在るか。
らか。

理想郷の帝の眸めをも欺あやむく秘せる逢瀬を叶える唯一の天、其れを彼かの生命は何と云いったか、大自在天はやはり、古の生命いにしえかみとしてこう告げるのか。

「化楽天にて叶う幻ゆめは、幻に非あらず。さりとて又、現うつに非ず。波旬天子よ、暫しの逢瀬を堪能しようではないか」

独特の形をした波旬天子・夜叉の耳元で甘く囁けば、これが初めての逢瀬ではないことを証明する様に、慣れた様子で微笑み返す。
鬼の容姿に不釣り合いな、優しげで輝かしいその表情かおに、何とも非情なるは玉座で在ると大自在天は心を痛めるのだ。

「伊舎那樣、また…その様なお顔をなさつて…。私は帝に感謝こそすれ何処どこにも憂いはありませんのに。伊舎那樣にこの《天魔》をお預けなさつた故に、こうして情を頂けるのですから—」

全ては帝の計らいだと言う様に、夜叉は己を抱く鬼窟きくつ裡の主を見詰めた。

「まるで、余が其方そなたを召すことすらも、玉座の計らいとばかりの言

い様よの」

何処となく余裕のあるは夜叉の方で、偉大なる大自在天も形無しだつた。

「仮令、そうだとしても、私は幸せにございます」

真紅の瞳をそつと閉じ、《天魔》という存在を身の内に封じ、宿命を享けた者のみが識るのだらう悼みをそうして昇華する。

大いなる時に依つて創り出された《化楽天》での情の営みは、御世を震撼させる大事の正に刹那まで、密やかに激しく甘く、続きのだつた。

嵐の前の静けさか、はたまたこれが常の宮中か、玉座の不在を識る由もない理想郷の神々は、永遠の時間の中で栄耀栄華を貪り続けていた。

理想の終焉を齎す忌神は遙か時空を隔てた時間の狭間に封じられ、其の覚醒は赦されることは無い。それが仮令、己が片割れで在ったにせよ、御世に《神》として存在を赦された、天に唯一の神に選ばれた誉れと何よりの安堵は、何ものにも変え難き不変なる理と、皆が皆望みし途であつた。

そうして天輪の正法は、徐々に歪を大きくしていく。嘗ての聖戦と謳われし過ちも、其の歪故の犠牲で在つたと気付くことが、天に背く情と成る。

多くを識り過ぎることは、時として酷なことなのだらう。

玉座と共に幻想郷から時間を渡つた光の生命は、傍らに眠る己と同じ存在の生命を見詰めながら、独り記憶の糸を手繰り寄せた。

全てを忘れ、理想に《新神》として存在出来たならどれ程楽であらうかと、愚かにも思う時がある。己の役目を放棄し愛しき者と手に手を繋ぎ、歪としてこの理想諸共に終焉を迎えられたらと、願つてしまうのだ。

『―愚かよの。我の憂いなぞ、あの者に比べれば浅きことであらうに』

時間に留まることも、御世に生きる者の心に触れることも出来ない命が確かに存在することを識る、稀なる生命はそう呟いた。

それでも彼の者は、歪を正す為に罪を犯す。

『何が罪と云えようか。何処に秩序が在ると、云えようか—』

『彼の者の願いは、唯ひとつでしょう』

眠っているとはかり思っていた愛しき者が、答える様にそう云った。

御世に生きる全ての命の願いを聴き、祈りで以って叶える神、樂園都市祈響元帥と呼ばれる月を神格化した月読は、光の神にこう続けた。

『されど、其れを叶えるには至りませぬ。其れを、彼の者が望みま

せぬ故—』

『月宮…』

『天照様、我は、余りに無力に御座います…』

小宇宙を讃える藍色の瞳が涙に曇る。如何に祈響元帥などと呼ばれても、自らが望み、願いを叶えることは出来ないのだ。其れを月読は無力と云ったのだろう。

『我等は共に、全てに於いて傍観者でなくては為らぬ、ということか』

『何時かは最大の咎を享けましょう。—それでも、我は独りではないのですね』

現在は御世に、理想郷東光殿として君臨する天照の創り出した《化楽天》で情を交わした月読は、最早何の疑いも憂いもないと微笑んだ。

柔らかな光に包まれ更に、黄金の波に攫われる。

月読を優しく組み敷き掌を重ね合わせ、肌蹴た胸に伝わる温もりは、揺ぎ無い鼓動を宿した天輪の正法の《有る生命》。

この天照とて、対となる《無い生命》は玉座に因り封じられている。そして又、月読も然り、だ。

《有》と《無》に依り成り立つ創造神の幻想は、天無帝の理想郷と

成り果てた。其処に何の因果が働き何の報いを齎すのか、この二柱の生命ですら計れない。

『無能勝は全て、承知と視るか？』

美しく濡れた朱の唇が、月読のものに熱い吐息を吹きかける。

『だとして、一体誰が…報いを引き享けるのでしょうか…』

『彼の者では、ないだろうな』

震えながらも応える様に、黄金に波打つ天照の髪を梳き月読は僅かだが、腰を浮かせて身を委ねた。

巧みに舌を使い、愛しき者の情を一層引き出す光の神に翻弄され始め、無能勝明王の企てに意識を集中出来なくなる。

御世の担い手と称される程の存在が目論む一大事だというのに、天照が事に采配するだけで之程安堵しきるとは、些か蟲が良過ぎるのではないかと己を叱咤するが、それも甘い疼きに呑み込まれて知らず身体を開いていく。

導かれる先に待つ高揚と満たされる官能の渦は、封じられた対の秤と一つになる満足感と何一つ変わらない。共に与え合い、味わう時の欠片で補う命は二度と、離れることはないだろう。其れが叶う《化楽天》は、若しや幻想郷なのだろうか。

『天照様…。嗚呼、いいー』

乱れきった月の神の様子に、光の神も昂りを抑えられなくなる。

吐き出された情を一切零すことなく飲み干した後、己の猛りを静める術は繋がりだけだと細く白い脚を大きく開き、露にされた窄まりに宛がった。

熱を感じた月読が、一瞬怯む。

しかし、一度繋がりを覚えた身体は素直に求め、深く満たされることを望んでいたのだ。それは隠し様もなく、潤み始めている月読自身が分かっていた。

『天照様…はや…く…』

躊躇いながらも囁く愛しき者の誘いに、逸る心を諫めて腰を進めれば、何の抵抗もなく受け入れられた天照は満足気に瞳を細めた。

『つきのみや月宮、我と共に在れ—』

俄かに発せられた光の神の願いに、月の神は頷く。

ききようげんすい祈響元帥として御世に存在することを今ほど嬉しく思ったことはない、つくよみ月読は容赦なく押し入って来る熱を全て呑み込み悦びに漂うのだった。

七

七

何時果てるとも知れぬ情の営みは、密やかにも《化樂天》にて交わされる。

唯一の逢瀬を赦される其処で己が主は何を願うのか、未だ何の知らせも受けられないでいた少女は知る由もなかった。

楽園都市祈響元帥の居城・月宮天でこうして手を拱いている自らが如何にも齒痒く、つい、うろつろと同じ場所を行ったり来りと落ち着けない。まるで檻に閉じ込められた小さな獣の様に、それでも瞳は気高く光輝いている。

少女の名は瑠璃といった。

《人族》でいえば十四、五歳だろうが、祈響元帥の側近として役目を全うする賢きこの少女が、後に月読の神剣・香王水月と成る神・瑠璃香王である。

しかしながら今は、姿を消した主を案じるしか術のない、か弱き存在で在った。

「っつ。あのくつたら、上手くやってるのかしら……」

幼馴染の龍王を手玉に取る気の強さは生来のものだが、事己が主の為となると些か冷静さを欠く様だ。

何の手筈も整えぬままに、諸天中央・帝釈天の居城へと様子見を頼み、その依頼が次第によつては八大龍王のひとり、あのくという少年を破滅に導くのだという虞に気付かない。或いは彼を信頼してのものか、それにしても無謀極まりない。

楽園都市に在る御世の政を行う宮を護る要塞・善見城は、主・帝釈天の許しがなくば立ち入ることの出来ぬ堅固たる結界が張り巡らされた、謂わば聖域だ。

八大龍王といってもあのくは未だ若輩で、その様な場所に出向い

たとしても門が開かれる筈はない。故に、詰まりは「忍び込め」と依頼したことになるのだ。

その結界があのかく龍王の身に何を齎すものなのか、祈響元帥の従者ならば容易に推測出来様ものが、主の身を案じる余りに半ば泣き落としてしまったのだった。

「月読様は、御無事かしら…」

そう呟く瑠璃は心底主に惚れ込んでいて、幼馴染の少年のことなど二の次だ。

確かに御世に稀なる《旧神》が相手ではあのかくに分は無いだろが、加えてあの容姿にあの清浄さでは勝負にもならないだろう。偉大なる月の神・月読は、玉座の御手を預かる程の存在で在り、又御世を導く《星読》を成す生命なのだ。

その祈響元帥を攫ったとされる諸天中央が望みは瑠璃曰く、色欲の為らしい。

宮中においても事ある毎に、何かと係わりを持ちたがる節が見られ、終には文を送り誘う始末。如何に瑠璃が賢いといっても、流石に無能勝明王が此度の企てを察知することは、出来なかったのだ。空を仰いでも隠れた月の姿は見つけ出すことは叶わず、このままでは怖ろしい事になると知らず不安に苛まれる。

月読の為に何かをしたいと、幼き瑠璃香王が決意はこうして始まりを見たのだ。

よもやそれが、後の月読が支配下の幻界に於いて如何係わるかなど、恐らくは月読とて計れない、輪の理で在った。

そして、そんな少女の願いに応えた少年はというと、何とか無事に結界を抜けて瑠璃の主を探していた。

途中行き会った帝釈天の忠実なる僕、多聞天にあわや曲者と斬り棄てられるかと思いきや、月読の居場所を事も無げに聞き出せたのだ。しかし、事が上手く運び過ぎると疑心暗鬼に陥ることはなかった。

要塞・善見城の護りは、確かに強固で怖ろしいものだと思を以つ

て感じたからだ。

此処に辿り着けたのも、実は月読の導きだとあのくは思っていた。あの結界に触れた時、あるうことか瑠璃の姿と声を映した邪神に、時空の狭間に墮とされかけた時、俄かに己を平ぶ韻を聞いたのだ。無論、それが月読の韻だと判じられた訳ではないが、他に想い付かなかった。

あのくの願いを聴き、結界に祈りを響かせ邪神を祓う事が出来る神なぞ御世にふたりとして存在しない筈だ。

「祈響元帥様は、流石に瑠璃のことをよく分かっていらっしゃる」そう呟いたのも、故に己がこうして善見城に忍び込むことを推測してのことだと、判断したからだ。若しかしたら、瑠璃自らが出向いてくると思っていたのかも知れないと、知らず苦笑する。幼馴染の快活さは祈響元帥にとっても好ましいのだろう。

「…愛されてるよなあ、瑠璃ちゃん。普通だったら厳罰ものだよ」と溜息混じりに言うのは、あのくも瑠璃を好いていたからだ。それでも些か幼過ぎるのか、双方共に潔癖なところがあるからか、その情が邪に歪むことはなかった。

果てしなく広く複雑な城に実は命懸けで忍び込んで、漸く辿り着いた一つの扉を前に、あのくは最後の覚悟を決める。

此処まで来て今更覚悟も何もないのだろうが、それでも此処から先が善見城の最たる場所だと思えば当然かも知れないと、足元から震えが来た。慎重に辺りを見回し警護の者が見当たらないことに不自然さを感じながらも、少年は扉を拓いた。

善見城の東側に設えられた、主・帝釈天の住まう《喜見の間》と、続く《月輪の間》は此処から先に在る。

多聞天の忠告によって水の幻力に惑わされない様、細心の注意を払って今、あと僅かで祈響元帥の許へと辿り着ける。

「お願いですから、我がお楽しみの邪魔者にさせないで下さいね、諸天中央様。…瑠璃、最悪は、逃げてでもいいかなあ？」

未だ耳に残る艶かしい嬌声に全身を染めながら、あのくは空を仰

いだ。

そして、気付く。仰ぎ見た空に重なるもう一つの時空に――。

「……なんだ？幻？」と思わず口にする程、其れは夢の様に空ろで怖ろしい程美しかった。己の様な存在では決して昇る事の出来ない、正に尊き生命の最高位を感じさせる時空にあのくは驚愕する。

「なんで此処に……。若しかして、水の幻力に――！」

目を見張って空かさず身構えたが、水神の眷属が故に惑わされる結界とはやはり違う様だった。本当に、只、其れは幻想として其処に在る、そういうものだった。

あのくが目にした時空とは、恐らくは《化楽天》のことだろう。

何故見ることが出来たのか、それはあのくにも解らない。そして《化楽天》を創りし光の神も、解らないかも知れない。これが偶然というもののなのだ。

御世において最高位の煌きから果ては色欲に淀んだ淫靡な間と、この善見城がひとつの理想郷の様だと思ったあのくは勘が鋭いのか、確かに此処には幻界を大まかに見た《九界》に等しい空間が、それぞれの間には漂っていた。

張り巡らされた護りの中に邪神が潜む暗黒を抱き、密かに放たれた刺客を糧とし生き延びるのか。

ひとつの幻界を任された主神でもないというのに、盟約を取り交わした帝釈天とはやはり只の成り上がり者ではなかった。

不意に目にした幻想に魂を奪われそうになりながら、あのくは必死に拳を握り締めて、更に両足を踏ん張り自らに言い聞かせる様に声を張り上げた。

「我は……八大龍王が一、あのくなり。我は善見城にて祈響元帥様のご意志を賜りたく参上仕った。尊き月宮様は、何処におわしまするか！」

びりびりと痛い程の刺激が肌に伝わり、やがて全身の感覚が麻痺しだした頃、眩い光に包まれて幻想は霞に隠れていった。

何時の間にかきつく目を閉じていたにも係わらず、其れは瞼を射

抜いてあのくの脳裏に刻み込まれ、最後に火花が散る様に一瞬煌いて完全に消滅した。

あのまま魂だけ現から抜け出してしまうていたら、其処に存在するあのくにとつては大きな力に押し潰され、恐らく戻って来ることは出来なかっただろう。

「―全く…龍王に選ばれる為の修行より、遥かに堪える…。生きて帰れたら瑠璃に礼の一つでも言わせなきゃ、割りに合わないよ…」呼吸を荒げながら、何とも可愛らしい報酬を幼馴染の少女に強請ってみた。すると

「―それは、ご苦労なことだな」と返る言葉があった。

驚きの余り頭は真白になり、何処かでこれは夢の続きと願いたくなる。

尊き神を招いている故の厳戒令が敷かれている善見城で、何故こつても重要神に容易く出会うのか、あのくは如何にも合点がなかった。

瑠璃に代わって労いの言葉を放った者は、諸天中央・帝釈天だったのだ。

「何とも珍しき客人よ。幾重にも張り巡らされた護りの結界を越えるとは、是非とも御素性をお聞かせ願いたい」

嘘偽りも、裏に策略も一切なく、心底関心した趣でそう尋ねられる。しかし、あのくは直には何も、答えられなかった。

当然と言えば当然だろう。御世に残虐非道でその存在を示す帝釈天が突如として現れ、あのくはとうとう城に忍び込んだことを見咎められたのだ。

それも、善見城の主に直接だ。

最早、何の言い逃れも身を隠すことも出来ないということは、詰まりはこの場で首が飛ぶ可能性が極まった、ということだ。

話には聞いたことのある、走馬灯の様に次から次へと記憶が廻る己の瞳の奥からじわりと溢れてくるものに気付いても、そのまま零すことしか出来なかったあのくは、ほんの幼子と何ら変

わりはなかったのだ。

「これは…困ったな。子供を泣かせたとあつては多聞天にどやされる…」などと云いながら、声なく泣き出したあのかを上から見下ろし終に、その手が動いた。

あのかは咄嗟に身を竦め、心の底で幼馴染の少女の名を呼んでいた。しかし―。

「よしよし、泣くでないぞ」と優しくあやしながら、逞しい胸に抱きすくめられただけで、少年の細い首が胴から離れ落ちることはなかったのだ。

「如何にもこの帝釈天を誤解する者が多くていかん。我は別に、無益な殺生を好む訳ではないのだぞ？それでも属性は仏界なのだ。

―解るか？」

涙に濡れたあのかの顔を覗き込み、帝釈天はそうは云うが何故か説得力がない。

それは、鍛え抜かれた体軀に戦の最中でもない筈が鎧を纏い、腰には愛刀を携え鋭い視線は幼子と見なしたあのかに対しても変わらないことが、物語っていた。

帝釈天は気が短く、気性も荒いと聞き及んでいたあのかは何とか早く泣き止もうと試みたが、故に余計怖ろしく、己でも如何することも出来なくなってしまうていたのだ。このままでは本当に、只泣き止まないことで斬り棄てられそうだった。

「如何なさいました」

其処へ、両者にとつての救いの神は現れる。

「―祈響元帥様！」

形振り構わず叫んだあのかに驚いたのは、帝釈天も同じだった様だ。

抱かれていた腕を擦り抜け祈響元帥の膝元へ、それは見事にも鮮やかな身のこなしで駆け寄ったあのかに目を丸め、「嫌われたものだ」と呟いては天を仰ぐ。

「祈響元帥様、お探し致しました。…よく…ご無事で…」

「―そなたは、若しや、瑠璃の…？」

「水神が眷属、八大龍王・あのくに御座います。漸く…これで…」
その言葉の続きが果たして何であるのか、帝釈天は思ったままを云った。

「ふむ。漸く、これで、命を拾った…か？」

「違いましょう」しかし、流星は瑠璃の主か祈響元帥か、緊張が解けたことで意識を失ったあのくを包み込む様にして、小さく微笑みながら月読はこう訂正した。

「瑠璃に…我の従者に、顔向け出来る…でしょうね」

黄金の波が、少年を攫っていった。

ふわふわとした感触が心地好く、只ぼんやりと己が己を見詰めている、そんな可笑しな現象にしかし、思考が付いて行っていない。
虚ろで在りながら、それでも心は光に満たされていて、少年はそのまま暫くをまどろんでいたのだが―。

不意に襲った衝撃は、恐怖という名において光を掻き消してしまった。

足元から崩れ去った大地は跡形も無く、ぽっかりと開いた暗黒が少年を呑み込みこのまま奈落へと連れ去ろうとしていたのだ。

力の限りもがいても、張り裂けんばかりに声を上げてても、其れは少年を逃しはしなかった。真白き御魂を穢す侵食は然も当然の如く、以つて是を成長とする。

『―大丈夫です。其方が怖れを識る限り、侵食に支配されることはありませんせぬ』

一切の視界が利かない暗闇で、唯一の導は月輪であった。

淡く儚い幻の様に揺れる光は銀色に輝き、全ての命を導くかの様に其処に在る。

「我は、役目を終えたのだろうか…。此処は冥府・炎獄界なのか？」

夢想に漂うばかりの少年は、所謂死後の世界と言われる幻界に来

たのかと、暗闇の中で己に残る記憶を巡らした。

其処には辛い出来事よりも、愛くるしい少女の花の様な笑顔が多く在った。常に未来を信じ、主を只管に慕う幼馴染は眩い光に包まれて、少年を照らしていたのだ。

「あのく。私、きつと月読様のお役に立ってみせる。その為だったら何だって乗り越えて、何時か私が月読様をお守りするの。きつとよ」

それは少年が八大龍王として選ばれた時、少女がまるで己に誓う様に言った言葉だった。口だけが達者と呆れなかったのは、彼女がかなりの努力家で、負けず嫌いで、そして賢く強い信念の持ち主だと知っていたからだ。

「私達、ずっと一緒よ。約束よ。属性が違っても月読様は水にも通じる御方だもの、大丈夫。あのくも精々（せいぜい）お役目を全うして、私の役に立って頂戴ね！」

「…瑠璃、我は、役に立ったかな…」

「―其の為には、彼女の許へ戻り、祈響元帥殿の御無事を伝えてやらねばな」

俄かに聞き覚えのある、いや、忘れる訳のない韻があのかの心に木霊した。

「―！雨水様…？如何して？」

しかし、紛れもないあのかの主、水神・雨水の姿はなく、代わりに果てない暗闇だった其処は徐々に光を増して、あのかの瞳に藍色の小宇宙が広がった。

「…気が付きましたか？具合は如何です、あのく」

「祈響元帥様…。？あれ？…我は、いったい…」

意識を取り戻し、あのかは何かあったのだらうと必死に思い出していた。何故、幼馴染の主が目の前に居て、韻を聞いた筈の己の主が居ないのか、混乱を来たず。

「夢でも見ていたか？存外、胆の据わった奴だな」

とあのかの顔を覗き込む様にして、月読の傍らからは諸天中央が言

葉を掛ける。

否応なく思い出された先刻の出来事に、又もや緊張と恐怖で固ま
ってしまった少年を見て、月読は当然と帝釈天を詰った。

「お下がりのさいませ、諸天中央殿。貴方が居らしたのでは、話
も出来ませぬ」

「何と、此度の客人はこの城の主を蔑ろにすることか…」

「申し訳ありません」と言葉だけの謝罪を月読は事も無げに述べ、
全くそうは思っていないことをそれこそ何とも思っていない様子で
平然としていた。

この麗しき月の神を平伏すことが出来るのは玉座のみなのだろう
と、あのくは幼馴染の主にも拘らず、誉れに胸が熱くなる。

見事な装飾で飾られた寝台に横たわるあのくの傍らに月読は座し、
静かに諸天中央を見上げている。其の眼差しが如何なるものだった
のか、見えないながらも勘のいいあのくには容易に推測出来る、そ
んな遣り取りを目の当たりにする羽目に陥り危うくまた卒倒しそ
うになったのは、直後のことだった。

徐に差し出して来た帝釈天の指が月読の白皙の頬に触れるか否か、
そつと耳元で囁く言葉を待ち望むかの様に僅かに傾げた細い首、垣
間見えた微笑、どれを取っても情を交わした者同士の馴れ合いでは
ないかと、あのくの鼓動が高鳴る。

「よかろう。我は一度、宮中へ戻る故、暫しゆるりと致すがよい。
多聞天が先に動いている筈だしな…。我が迎えに来るまで、城から
は決して出るでない。よいな」

「承知致しました。…何卒、良しなに―」

唇が触れ合う程の距離でそう語り合い、最後は間違いなく接吻を
交わして帝釈天は月読の傍を離れた。

「…あのく、この場合、凝視するは如何かと思いますが…」

そう云われても、あのくには何のことか分からなかった。しかし、
真白になっていた頭が辛うじて理性というものを取り戻すと、あわ
や今更ながらに視線を外し、耳まで真赤に染め上げて俯き「し…失

礼致しました！」と叫ぶ。

我ながら何とも情けなく、この事を瑠璃るりが知ったらと思うと背筋が凍り付く。

それを察したのか月読つきよみが、今度はあのくの耳元でこう囁ささやいた。

「秘せる逢瀬は化楽天で叶いしや…。あのく、全て、密事みつことですよ。

—是これには天に通ずる謀はかりごとが在る故ゆえに」

「…か、畏かしこまりました。我が主、水神・雨水様の名においてお誓い致します」

他に言葉が見当たる筈もなく、あのくは顔から火が出る勢いだっただが何とかそう答えた。そして、漸やく鼓動も鎮まりかけた頃、祈響ききよう元帥げんすいの「謀はかりごと」という言葉に気付き、一抹の不安を抱いたのだ。

だがその前に、先まずは礼を言わねばと口を開く。

「あの、祈響元帥様ききようげんすい…。助けて頂き、有難う御座いました」

その礼を何のことかと問う眼差しも何とも美しく、まるで夢見心地に浸りながらしどろもどろと説明するが、やはり心当たりがない様子で月読つきよみは云った。

「如何いかに我わたくしとて、他の者の結界においそれと近付くことは適かないませぬ。其方そなたを誘いざのった韻こえとは、どの様な力だったのか…」

「暗黒の彼方かなたに封じられた、禍々（まがまが）しい存在を一瞬にして退ける様な…。ですが、其れが如何どういった類たぐいの力なのかは、実は分かりかねて…。御世には存在しない筈の力だった様な、でもそんな馬鹿ばかなことは—」

「御世には存在しない筈の力—」

ふと、何かに思い当たったのか月読つきよみがあくの言葉を繰り返した。

「祈響元帥様？」

たおやかな美貌が俄かに曇り、藍色に煌く小宇宙が揺れる。

「現在の結界の内に潜む影とは影にして影に非ず。ですが、よも

や—」

其その続きを何故にか聞きたくないあのくは、確かな天命を宿した御世に存在を赦された神だったのだ。そしてそれに気付いた月読つきよみは、

言葉を濁すのだった。

「識らずとも、我等は大なる時に護られておるのでしよう。――瑠璃の情が、其方を護ったのかも知れませぬ。如何かこれからも、あの子の力になってあげて下さいね、あのか。御世を担うは其方等なのですから」

戸惑いながらもあのかは「勿体無い御言葉です」と恐縮する。そして、何時までも己には不釣り合いな寝台に居るを良しとせず、滑り降りる様にして抜け出すと、改めて尊き生命に対し礼を取った。

「祈響元帥様、重ね重ね失礼を致しました。誰の許しも得ず、勝手なる振る舞いに咎は無論、このあのか自らが負いますれば、何卒詮索は無用に願ひ奉ります」

「ふふ……。その様なこと、申さずとも承知しております。心配要りませぬ」

そう軽く受け流す月読に安堵しつつも、本来ならば目通りも叶わないだろう偉大なる《旧神》と、御世の守護神、諸天中央・帝釈天に首が飛ぶ様な失態を見せた己を他の神が知ったとすれば、それこそ何のお咎めもないことに迷惑が掛かるのではと逆に心を配る。

「大丈夫です。其方が我等に対し、気を遣うことはありませぬ。全て、彼の御方が良きに計らいましょう。……そう、何事も、全て――」

心なしか頬を染めて、月読はあのかに云い聞かせる。其の様子がまるで今までの、諸天中央に対するものと違い過ぎる様で、これはもう観念するより他はないと思つたあのかは、瑠璃に何故か詫びていた。

祈響元帥が何を以つて、全て帝釈天が良きに計らうと云うのかは別として、仮にも御世に八大龍王と平ばれる以上、結界で聞き捨てならない言葉を耳にしたことを己の幻聴であつたとする訳にはいかないと、あのかは切り出すことにした。

「実は、我を捕り込もうとした者が、良からぬ企てを仄めかす言葉を残しました」

その事には流石に動じたのか、月読は先を促す様に頷いた。

「御世が彼の神の手に渡れば」。此れを、如何思われますでしょうか」

あのくが善見城の結界内で出くわした影が吐き棄てた、謀反の兆しとも取れる言葉をそのまま祈響元帥に伝える。

御世の安寧を担う《星読》の主が、よもや謀反に気付かない訳はないと知りつつも若しもの為にと言ったのだ。

「―存じております。我が此処に留まるのも、それ故です。…何時の時も、何故にか我こそが天の覇者となりたがる命が居る様で、不思議でなりません」

《旧神》で在る故か、又は既に天の頂点に居る故か、月読は大層呆れた様にそう云った。それに何の意義と、何の意味が在るのか、そして何を夢想のかと―。

「…お言葉ですが、それは諸天中央様とて夢見ていらつしやるのでは？祈響元帥様なれば、お氣付きの筈と心得ますが」

「そう…ですね。我は、祈響元帥ですから…」

何処か遠くを見詰め、偉大なる《旧神》はそう呟いた。其れが余りに儚く脆いものに魅えて、あのくは得心がいかなかった。

御世に比類なき生命、最も尊き存在、天の二柱と称される月の神が、何故にそんな様子を見せるのか、全ての命の願いを聴き、祈りで以って叶える筈の祈響元帥とは、如何なる神をも跪かせる強大な力の持ち主ではないのかと、あのくは想ったのだ。

其処に在る憂いとは何であるのか、《新神》のあのくには理解出来ない。

「どちらにせよ、此度の謀は公には成さぬでしょう。…若しや、其方に咎が在るとすれば、識りながらも知らぬと言わねば為らぬ、事の方かも知れませぬ」

そう云いあのくに向けた小宇宙には、最早何の憂いも浮かんではいなかった。

「―お待ち下さい、諸天中央様。宮中へ赴かれるならば、是非と

も私を供に……」

高位の者が唯のひとりの供も連れずに善見城を抜け出そうとした刹那、まるでそれを咎めるかの様に告げたのは、光の神の眷属で在った天の楽師・乾闥婆だ。

既に帝釈天の配下に下ったことで、その属性は光より離れていた。しかし、只の見てくれでは如何違いがあるのかなど、分らない。

先刻までと同じ宮仕いらしい、それは雅な様子に抱いた見事な楽器、爪の先までも整えられた肌理細やかさは流石、天界一の楽師だ。

「歌姫のお相手は、宜しいのか？」

「あれは、私でなくともいいのですよ。最も暫くは、目覚めぬでしょうが」

何処か皮肉を込めた帝釈天の問いを飄々（ひょうひょう）と受け流し、歌姫の尽きぬ欲情を堪能させ悦びの淵に沈めたことを、淡々（たんたん）と述べる。あのくが聞いていたなら如何しただろうと、知らず口の端に笑みが浮かんだ帝釈天を、乾闥婆は見逃さなかった。

「何か、良き事でもございましたか？ 随分と優しげな表情をなさいますね」

「――我も、悦びの淵を覗かせた心算だ。褒美は自ずと知れような」

「……では、願いは叶うのですね？ その御手に――」

策略を知る乾闥婆は首尾を察し、僅かに頬を上気させる。

事は諸天中央の玉座転覆であり、言わんとしたのは御世が手に入る、という事だった。その為の祈響元帥なのだと乾闥婆も思っていたのだ。

「先ずは、お慶び申し上げます」

素直に頭を垂れる楽師に帝釈天はというと、

「何の慶びだか……。未だ事は全て、これからだというに」

と呆れた口調ですたすと歩を進めるばかりだった。

確かに御世の何を手にしたのかと言われれば、何も確実なことなど皆無ではあったが、願いを叶える力を有する祈響元帥を手に入れたも同然である以上、事は成ったと取って良いのではないかと乾闥

婆は言ったのだ。帝釈天に与えられる褒美とは、そういうことではないのか、と。其れが、祈響元帥の役目だと」。

「宮中へお戻りということは、多聞天殿と合流なさるのでしょう？あちらも無論、首尾は上々の筈。ということは、御世の安寧もこれまでですね…」

しかし、供をすると後に続いた乾闥婆の言葉に何やら含みを覚え、徐に歩を止めて帝釈天が振り返る。天の楽師は、その瞳に影を潜めて佇んでいた。

他に誰の気配もない善見城の回廊で、後の御世に大いなる影響を及ぼすふたつの命は静かに向き合い、互いの本性を探ろうと駆け引きを始めた。

「天の楽師ともあろう者が、戦神の様なもの言いだな。乱世に何を望む？」

「…諸天中央様の、新しき秩序を」

「現世の輪の正法は、氣に入らぬか？」

「現帝の御世の、何処に正法が？」

「…其方、何を識っておる」

この問いは、恐らく諸天中央・帝釈天の姿を借りた光の神・天照のものだろう。だがこの謀は密事であり、乾闥婆が気付いている筈はない。

暫くの沈黙の後、抱いた楽器を奏でるかの様に楽師は言った。

「眩い光に照らし出されても、影は一向に映されませぬ。それは、余りに光が強すぎるのか、又は影が封じられているのか。…輪の正法に従うならば、乱世は必定と申すまでのこと。それが叶わぬ御世は、些か正法から外れておりましょう」

「ほ…う。最もな意見だ」

現帝の理想郷と成って既に如何程の時間が流れたのか、先の聖戦からも久しく御世は安寧の中に在り、各幻界での小競り合いはあつても樂園都市を揺るがす程の大戦は起きていない。輪の正法とは「事は等しく繰り返すものとも」という慣わしと、簡略化して伝わっ

ていることを乾闥婆は《新神》として明らかにした。

妙に納得してしまった帝釈天、というか天照は、なるほど頷くだけで、己が《旧神》で在ることなど綺麗さっぱり忘れていた様にこつと言った。

「宴を催す。天の楽師殿には是非ともその席で、天界一の調べを奏でてもらいたい、如何か？」

「他ならぬ諸天中央様のお望みとあらば、否はございません。乱世の幕開けに相応しい、勇壮たる調べを披露いたしましょう」

不敵な笑みでそう応えた乾闥婆に上々と、高らかな声を上げて賛じた帝釈天は最早光の神ではなく、理想郷で剣ひとつを以ってして上り詰めた《新神》で在った。

現在、この時、確かに星は動いたのだ。

其れは奇しくも《星読》が不在の最中、天無帝の理想郷を騒然とさせる星の配置。

しかし天に唯一の生命の時は強大にして絶対で在り、其の天を支える二柱の生命も等しく稀なる存在。

故にか終に、御世が終焉を迎えた後にも此度の騒ぎは一切の《典》無く、只、愛しき者等の逢瀬を叶える闇が一時御世を覆ったとの

《記》に留まった。

全てが密事に処理された謂われはひとつが為ではない。

共に《有る生命》同士の惹かれ合いは輪の正法の歪みなのか、しかし其れを正せば玉座の御世は成り立たなくなり、封じられた対の秤を解くことは即ち御世の終焉を齎す事となる。

天に唯一の生命・天無帝が最も畏れた存在は一切が《無》なる生命。

現在、この時でさえ何処かより垣間見えては嘲笑っているのだろう、忌なる生命。

そして、交わされた情の行方は時海の彼方。

其れが《愛》故か、果ては《哀》故か、当の命でさえ識る由はな

かった。

全てが密事で在るが為に、一切が謀^{はかりごと}で在るが為に――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122d/>

月華典(げっかてん)外伝 秘する逢瀬は化楽天で叶いしや

2010年10月9日06時40分発行